

京都市文化財保護課 研究紀要

第9号

目次

建造物

養泉寺の建物について……………原戸喜代里・千木良礼子 1

美術工芸品

山本素軒筆「十禅寺再興縁起」（十禅寺蔵）について……………安井 雅恵 10

座談会「山國神社に伝わる世界地図をひもとく」……………鳥居 剛・藤田 明良・村山 弘太郎 20

埋蔵文化財

山科区御陵牛尾町出土の遺物について……………熊井 亮介 41

2026年3月

養泉寺の建物について

原戸 喜代里・千木良 礼子

はじめに

養泉寺は京都市東山区本町5丁目185に建つ。この度未指定の本堂と書院を調査する機会を得たので、ここに報告する。

沿革及び本堂について

『京都市の地名』によれば養泉寺は真宗大谷派で本尊を阿弥陀如来とする。『京都府地誌』に天文11年(1542)創建、僧浄通開基とするが、「坊目誌」によれば創建地は不明で移ってきた、とある。

また、寺には『養泉寺略記』という門徒向けの出版物がある(親鸞聖人七百回忌記念とあるため昭和35年(1960)頃に刊行とされる)。この略記によれば放光山今小路殿養泉寺は、平家一門ゆかりの寺で、建物の経歴に関する記載については、12代霊空の代で唐破風玄関を再建、天保3年(1833)に庫裏を再建した。嘉永2年(1849)に今小路殿・車寄玄関が再造される(昭和25年記録板を発見)。昭和25年(1950)に今小路殿・車寄玄関屋根を銅葺に変更したとある。

本堂は西面して建つ。建物は背面の内陣部分を切妻平入とし、手前の外陣部分を寄棟造妻入とした2棟の構成である。いずれも本瓦葺を基本とし、一部改修によって棧

瓦葺となっている。

規模について、内陣は正面桁行が七間、梁行が三間である。外陣は正面梁行が五間、桁行を三間とする。

外観について、内陣の南側面は白漆喰壁とし、上部をトタンでかぶせる。もとは土壁と想像される。東背面と北側面には半間の下屋がつき、廊下と物入を配置する。外陣は、柱間装置として西正面に棧唐戸を3枚設置し上部に菱格子の欄間をはめる。両脇は半部とする。北側側面は坪庭に面し、廊下が張り巡らされる。建具は西端を板開戸、中央と東端を明かり障子とする。南側面は西端を板開き戸、中央と東端を半部とする。半部の内部には引き違いの明かり障子を入れる。西を正面とし、南側側面は閉鎖的、北側側面は坪庭に面することから、北側は庭とのつながりを意識していると思われる。

正面向拝について、向拝柱には虹梁及び木鼻が付く。木鼻は渦巻絵様である。向拝柱及び木鼻には皿斗と連三斗を乗せる。虹梁の中央には出組、左右に墓股を置く。

室内について、外陣は畳敷とする。建具上部は白漆喰を塗る。天井は出組で支えられ、正面(西面)はその間に墓股を入れる。出組の木口には白漆喰を塗る。

内外陣境は、中央三間は明かり障子の棧唐戸とし、上部に雲の彫刻と金の彩色が施

された欄間を設ける。欄間上部は虹梁で飾る。左右は引き違いの襖を入れる。襖には松や花、金雲が描かれ、彫金が施された引手金具が付く。内外陣境の側柱と鴨居の納まりには改変と思われる痕跡がある。

内陣は、白漆喰の垂れ壁によって3室に分けられる。床はいずれも床板である。

内陣中央の室は、中央に須弥壇を置く。須弥壇は年代の記銘がないが、須弥壇下の内部を確認すると丸釘が使用されていることから、近代のものと思われる。天井は黒漆に赤漆で縁取りした格天井とする。格天井板は後補材の布を貼る。左右背面には位牌棚を置く。位牌棚上部は龍を彫刻した欄間をつける。位牌棚の壁面は金箔をはり、蓮が描かれる。

内陣の左右の室は、天井を棹縁天井とする。背面には位牌棚が設けられている。位牌棚上部は天女や鳳凰を彫刻した欄間をつける。位牌棚の壁面は金箔を貼る。

内陣の位牌棚はいずれも、棚を黒漆塗とし、飾金具を付ける。腰板の額縁にはさらに飾金具も付く。板は型押しした金属板（年代不明）をつけている。

また、銘入りの獅子口が2基、保管されていた。刻銘は「寛政二年（1790） 戌霜月 近江屋権兵衛志 細工人 同安之助」、あわせて丸に「大」の刻印が押される。絵様からみてもこの時期の年代の建物と思われる。

内陣と外陣の境の痕跡や、屋根の様子からは、当初は内陣のみで後世に外陣が付属されたようにも見受けられるが、確証が得られない。建物全体としては、改変の様子も見受けられるが、本瓦が用いられている

ことや彫刻や彫金などの細部意匠が多様に使用されている点からは、丁寧につくられた様相がわかる。

（千木良）

書院について

書院の建築年代は明らかではないが、養泉寺には弘化2年（1845）の普請願が残されている。この普請願は、塀の改修や一間四方の男部屋の建築の他、本堂北の座敷に繋がる廊下の西に3畳敷の建物を建てたいというものである。付属する計画図には、本堂の北に位置する東西に長い建物が記載されている。本堂の東端と西端に2カ所廊下が設置され、そのうちの東端の廊下の西に、新築を計画している3畳の建物が朱書きされている。東端の廊下は現存しないが、本堂、廊下、書院の位置関係は現状と大きく変わらないと思われる。

明治19年（1886）の『寺院明細帳』には養泉寺の由緒や境内の建物、配置図が記載されている。養泉寺の書院は、桁行八間、梁行三間とあり、現在の書院の建物より桁行が一間半長い。『寺院明細帳』の配置図では、弘化2年の図面には書院の西にあった土蔵がなくなり、居間や玄関が建てられている。前述の記録板に記される嘉永2年（1849）の今小路殿・車寄玄関の再造により、整備されたと推測される。書院と居間、玄関の配置は現在のものと同様とみられ、この頃には寺観が整えられていたと考えられる。

現在の書院は、本堂の西端から北へ延びる吹き放しの廊下で接続される。切妻造平

入で、桁行六間半、梁行三間の東西に長い建物である。軒は一軒で、角垂木の化粧屋根裏となっている。桁は舟肘木で支持される。六葉の釘隠を打った内法長押を廻し、舞良戸を建てる。舞良戸には鶴と松とみられる吉祥文様の飾金具が打たれている。

書院の平面は、東から西へ8畳の上段の間、10畳、8畳の3室が接続する。南側には幅一間の入側が設けられ、さらにその外側を落縁とする。北側にも縁が設けられ庭を眺めることができる。

書院東端に位置する上段の間は、東面に間口1間半よりやや狭い床の間と床脇に違棚と地袋を設け、南面は帳台構とする書院造である。西面には4枚引の襖、北面は付書院とすりガラスが嵌められた引違のガラス戸となっている。ガラス戸は、大正期から昭和初期に流行した意匠であることから、この頃に、おそらく他の2室同様、障子だったものがガラス戸に入れ替えられたと推測される。

床の間の壁は漆喰塗で、1枚板の床板、床柱、落掛は黒塗とする。長押も漆塗とし枕捌きで納められる。長押には六葉の釘隠が打たれ、小壁は漆喰で塗られている。東面の床廻りの部材は、加工の状況から南面、西面の部材より新しいものと思われる。

床脇の棚や地袋も漆塗で見付には植物文様の飾金具が付く。地袋の扉は脱落しているものの、室内に残されている地袋のものとみられる板戸には吉祥文様の鳳凰と桐が描かれており、扉に描かれた絵は、江戸末から明治のものともみられる。

天井は白紙が貼られているが、四方には

四分一が取り付いている。白紙の下には下張りが見えるため、元は天井に絵が描かれていたとみられる。上段の間の天井は、格式の高い格天井と考えるのが通例であるので珍しい構成である。

帳台構の襖は近年張り替えられたもので、紋縁付の唐紙が張られる。西の10畳間との境の4枚引の襖は菊の文様で引手も植物の文様とする。

明治19年の書院の南側には梁行一間半桁行二間半の茶室が接続しているが、現在は梁行一間となっており、半間小さくなっている。東面の床廻りの部材が比較的新しいことや地袋の絵の年代から推測して、明治19年以降のどこかの段階で、書院や茶室の東面が改修されたのかもしれない。

上段西の10畳と8畳の間は、竿縁天井で小壁は漆喰塗とし長押が廻される。長押には釘隠が打たれる。北面と南面は腰障子とする。2室の境には竹の節欄間を入れる。2本溝の敷居があることから、元は4枚引の建具が入ったとみられる。欄間上部の空間が連続しており、広い空間を感じさせる。

入側は、竿縁天井が張られ、縁境の舞良戸の室内側は障子を建てる。入側の欄間は、植物の文様が彫られている。上段と10畳間の境の通りには、座敷と同様の菊の文様の襖が入る。

書院は厳格な書院造を基本とし、とりわけ、上段は付書院、床の間、違棚、帳台構が揃う格の高い書院造とするものの、天井は格天井ではなく天井画が描かれていたと思われる。また、上段に続く10畳、8畳の間の庭に面する建具は障子のみとし、室境

には竹の節欄間を入れて2室の天井を連続させることにより、軽やかで広い空間を創出した。養泉寺書院は、格式を持ちつつも

軽やかさを併せ持つ興味深い接客空間と考えられる。

(原戸)

はらと きより
原戸喜代里 (文化財保護課 主任 (建造物担当))
ちぎ られいこ
千木良礼子 (文化財保護課 主任 (建造物担当))



図1 門



図2 本堂全面 (西面)



図3 本堂南面



図4 向拝柱上部



図5 向拝虹梁上の簷股と組物



図6 内陣（中央）



図7 脇陣



図8 須弥壇上部（隅部）



図9 須弥壇上部



図10 獅子口

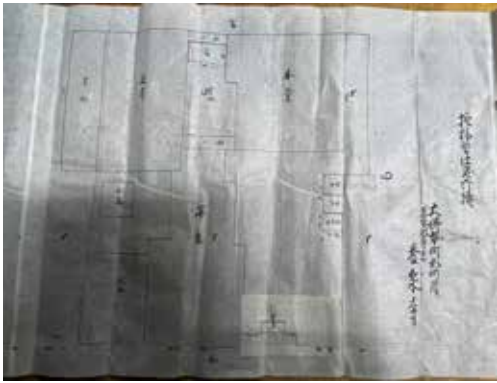


図11 弘化2年 普請願の配置図

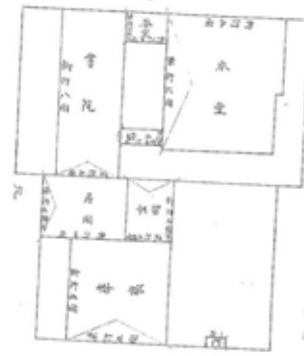


図12 明治19年 寺院明細帳より



図13 書院 外観南面



図14 舞良戸の飾金具



図15 上段 室内東面



図16 上段 室内北面



図17 六葉の釘隠



図18 違棚



図19 違棚の飾金物



図20 地袋引違戸 (左：桐 右：鳳凰)

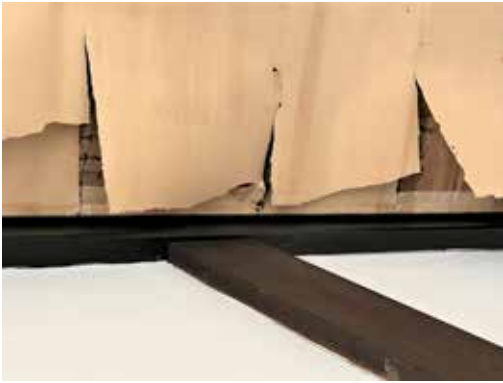


図21 天井 下張りが確認できる



図22 帳台構



図23 10畳間と8畳間 東より西を見る



図24 10畳間より上段を見る



図25 入側の天井と竹の節欄間

山本素軒筆「十禅寺再興縁起」(十禅寺蔵)について

安井 雅恵

1 はじめに

京都市山科区の楊柳山十禅寺は、本山修験宗聖護院門跡の末寺である。京の六地藏のうち山科地藏として知られる徳林庵(京都市指定文化財¹⁾)は旧東海道に面しており、六地藏巡りの時期には賑わうが、十禅寺はさらにその北をはしる京阪電鉄京津線を越えたところに所在している。

同寺には、江戸時代前半に活躍した山本素軒が描いた「十禅寺再興縁起」(以下、本作とする)1巻が下絵とともに伝えられており、令和7年3月28日付で京都市有形文化財(美術工芸品・絵画)として指定²⁾された。

本作については、田能村忠雄氏が昭和32年(1957)に『國華』に紹介しており、詞書も全文翻刻されている³⁾。指定に際してもその論考に拠るところは大きかった。しかしながら、この度の指定調査で新たに判明した事実もあり、その知見は作品を理解する上で重要と思われる。かつまた氏の発表からすでに60年を経ていることも鑑み、重複は生じるものの市の指定を機に、新知見に基づいてここに紹介するものである。

2 十禅寺の中興「江玉」について

本作には、平安時代に遡る草創期から、中世の荒廃を経て、承応2年(1653)に中興「江玉」が草堂を建てて復興、その後、夢告により十禅寺を厚く外護した明正上皇(1623-1696、在位:1629-1643)により堂宇が整えられたという十禅寺再興の縁起が語られている。

まず、本作の理解に資するよう、今回の調査で判明した十禅寺の中興「江玉」に関する知見について述べておきたい。

本作の第2段には、中興「江玉」について

中興真慶法師〈字江玉／富田氏人也〉は
禅に参し台宗に
むかふ又ト筮をつたへて妙を得たりみそ
かに大和歌をこのみてこれをたのしむ
壮年より廻国して所々の霊地にあそふ

と出自や信仰、人となりは述べられている。明正上皇の宸翰消息にも「かうぎよく」と宛名が記される、この人物は近年まで「江玉真慶」という一人の僧侶とみなされてきた。ところが、所功氏が同寺に「当寺中興柳陰菴江曲禅師真慶和尚」と「当寺中興二世権僧正江玉」の2基の位牌が存在



図1 十禅寺再興縁起 第1段 絵(全図)



図2 第2段 絵(全図)



図3 第3段 絵(全図)

し、前者の裏面には「天和三癸亥年九月十二日」、後者には「元文二丁巳歳三月十二日」と記されていることを報告され、「これが正しいとするならば、明正上皇が帰依された真慶法師は、前者の「江曲」とみられるが、「江玉」とも書かれることがあり、その表記が二世に受け継がれたのであろうか」と推測された⁴⁾。

実際の位牌を確認すると、所氏が報告された文字の他は何も刻まれていないため、権僧正江玉の法諱は不明である。しかし、同寺に伝わる文献史料に次のような記述が見出せる⁵⁾。

1点目は嘉永7年(1854)8月の朱印改に際して九世敬純が作成した『由緒書并手目録ノ扣』(十禅寺蔵。以下『由緒書』とする)である。ここに筆写される「楊柳山十禅寺御建立次第書」には

一 天和三<癸/亥>年九月前任江玉卒、同霜月十禅寺住持を被 仰付候、岡部土佐守殿被 仰渡、同十二月名ヲ江玉ト御改畢

という記述があり、この文書の末尾の署名は「二世江慶」となっている。

次に慶応4年(1868)の年紀がある『記録 裏松家江差出扣』(十禅寺蔵。以下『記録』とする)には、

(前略) 同年(稿者注:天和3年)真慶法師卒九月十二日、同十一月十二日江慶後住被 仰出岡部土佐守被申渡之

という記述がある。この2つの記述から、

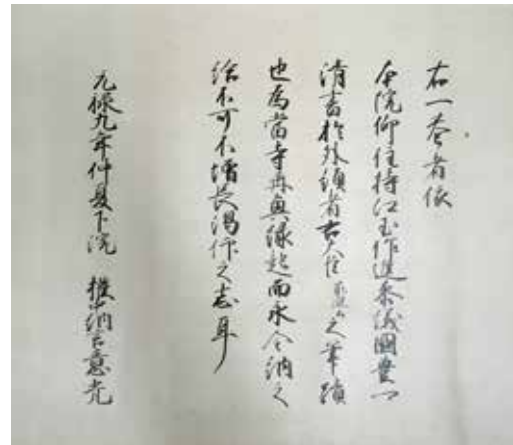


図4 奥書

天和3年(1683)9月12日に「江玉」真慶が亡くなり、11月12日に江慶が次の住持に任ぜられたこと、12月には「江玉」と改名したことが読み取れる。また、『記録』には

一 元文二年<丁/己>三月十二日江慶権僧正入寂 七十六才

という記述があり、位牌に記される命日と僧官の一致から、江玉と江慶は同一人物であり、76歳で没したとわかる。

これらは後世の記録ながら、朱印改や裏松家へ提出した文書の写しであり、かつ位牌の命日とも合致しており信頼に値すると思われる。すなわち、中興二世江玉の法諱は江慶で、享年から逆算すると寛文2年(1662)生まれと考えられる。

これを踏まえて、本作の奥書(図4)を見てみよう。奥書の筆者は裏松意光(1652-1707)で、元禄9年(1696)5月下旬の年紀がある。

右一卷者依

本院仰住持江玉作進参議國豊卿

清書於外題者右大臣〈家熙公ノ〉之筆蹟
也為當寺再興縁起而永令納之
給不可不增長渴仰之志耳
元禄九年仲夏下浣 権中納言意光

ここには、「本院」(明正上皇)が「江玉」に本作の制作を命じ、近衛家熙(1667-1736)が外題を、日野西国豊(1653-1710)が詞書を染筆したという経緯が記されている。この「江玉」は天和3年に亡くなった江曲真慶ではなく、二世江玉と比定できる。

また、本作の詞書には「真慶法師」という表記が3箇所認められる。特に第4段の「真慶法師より今にいたるまで」という記述などを見ると、二世江玉との混乱を避けるため、区別して「真慶法師」と記したことが理解できよう。

以下、小稿では中興の江曲真慶は位牌の表記を採って「江曲」、二世江玉江慶は「江玉」と記すこととする。

3 「十禅寺再興縁起」の内容と 図様について

それでは、本作の検討に移りたい。

本作は紙本著色卷子装の絵巻である。詞書は全4段で、このうち第1~3段には絵が付いているが、第4段は詞書のみで絵はない。末尾には奥書が付く。奥書を含めた本紙は全部で14枚の紙を継いで構成されている。各紙の法量は文末に表としてまとめた。表紙の外題には「十禅寺再興縁起」と記され、原表紙と見なせることから、奥書にあるとおり近衛家熙筆であろう。奥書

に絵師名は記されないが、第1段の絵の右下に「法橋素軒筆」の署名と「守常」(朱文方印)(図5)の印があり、第2・3段の絵には「素軒」(白文方印)(図6)が押されていることから、作画を担当したのは山本素軒(生年未詳-1706)とわかる。

各段の内容について、絵を中心に確認する。

○第1段(図1)

人康親王(831-872)による寺の草創期が取り上げられる。人康親王は仁明天皇の第四皇子で、病のため出家し、山科に隠棲して山科宮と号したとされる。『伊勢物語』第78段に登場する「山科の禅師の宮」は人康親王とされており、その山荘は風雅な庭園で知られていたようである。詩歌管弦に秀で、病で視力を失ってからも琵琶の名手として名高く、当道の祖神として崇敬された。

本作では、『伊勢物語』のエピソードも含みこみ、山科宮に奇岩を献じた藤原常行と在原業平と見られる2人の貴人と、庭を愛でる人康親王の姿が描かれている。

画面向かって右側に建物2棟が並んで描かれる。画面上方の建物は縁に面した戸が開けられ、屋内の畳の上には、僧形で墨染



図5 第1段落款

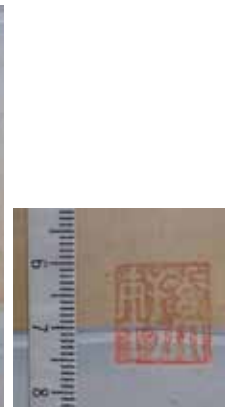


図6 第2段落款



図7 第2段 絵(部分) 江曲

の袈裟を着けた人康親王が、脇息に左肘をつけて座している。画面上辺には渡り廊下が描かれ、廊下の左には仏堂が配される。仏堂は瓦葺で縁が廻され、正面に階が設けられている。部戸が開けられた堂内には、黒漆塗りの須弥壇と仏像の蓮台の一部が描かれており、人康親王が安置したという十禅寺の本尊聖観音立像を表していると思われる。渡り廊下には在原業平と思しき狩衣姿の男が座る。庭には池があり、その右岸に据えられた巨岩の傍らに藤原常行と思われる男が立つ。庭には形の整った松が茂り、広やかな池の中島には橋が架けられ、画面左上部の木立の間からは池に向かって滝が流れる様が表現されている。住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」(東京国立博物館蔵)巻第4などの同時代の絵巻を翻案したような図様となっており、「伊勢物語」とのダブル・イメージにより寺の由緒正しさを知らせる工夫が感じられる⁶⁾。

○第2段(図2)

中世から近世初頭までの兵火などによる寺域の荒廃と、それでもなお護り伝えられた本尊の奇瑞を語り、承応2年の江曲による草堂の再建へとつなげる。絵は、再興した江曲の草堂を中心に、東海道の往還も描



図8 第3段 絵(部分) 江玉

いている。

画面中央上部の草堂には縁が廻され、内側の畳敷の座敷には江曲と侍烏帽子、直垂姿の武士が対面している(図7)。その奥には本尊を祀る須弥壇が描かれる。庭の松の根元では3人の武士が座り、座敷を見やりながら主を待っている。門の外でも3人の武士が座り、そのうち2人は馬の手綱を握り、その傍らでは傘持ちの男が脚絆を結びなおしている。この場面は、詞書第3段の明正上皇が人を遣わして十禅寺を探し当てたくだりを先取りしているかのようなのである。画面下部は東海道であり、寺との境には竹矢来が立てられ、寺の入口には簡素な丸木の門が備えられる。門から少し離れた右側に六角形の地蔵堂(山科地蔵堂)が描かれており、当地のランドマークとなっていたことが見て取れる。その右側の民家は茶店のようで、街道沿いに竈があり、壁には草鞋なども描かれている。東海道には荷物を背負った旅人や僧、丸木を背負う男と柴を積んだ牛、鋤を担いで歩く農夫などが描かれている。寺の左側には東海道を横断する川があり、橋が掛けられている。川向こうにも民家がならぶ。画面左上に描かれる遠山は諸羽山であろう。



図9 第2段 絵(部分) 山科地蔵堂と松



図10 第2段 絵(部分) 侍待ち

○第3段(図3)

明暦元年(1655)の夢告により、明正上皇が十禅寺を見出し深い信仰を寄せたこと、その寄進を受け寺の再興が成就したことが語られる。

絵は、桜が満開の春の景色として表現され、復興された伽藍に多くの人々が参詣している。詞書に記される本堂、鎮守天満宮、鐘楼は残らず描かれている。本堂は屋根が柿苺のように表される、立派な建物である。詞書に長文の由緒が記される鎮守天満宮は、石積の上に建てられた、朱塗りの柱の小さな祠であるが、祠の傍らに梅を描いて鑑賞者にそれと知らせている。塀で区画された本堂の右上方の建物には、袴を着けた2人の武士と対面する江玉が描かれてい

る(図8)。境内は本堂の前で額づく小袿を被った女の一行はじめ、巡礼など、多くの参詣者で賑わっている。画面左には川が描かれ、川沿いには、上方から鐘楼、手水、茶店が描かれる。画面下辺は東海道であり、寺との境は右側が土塀、左側が竹矢来で整備され、それぞれに門が設けられている。六角形の地藏堂(山科地藏堂)にも桜が彩りを添えている。東海道には牛が曳く荷車や、荷を乗せた馬、荷を担いだ片肌脱ぎの男、僧侶等が行き交っている。

○第4段

詞書では上皇の徳を賛仰するも、絵は付かない。

○奥書(前掲)

全体の構成は以上である。

本作の絵は、約95センチメートルの紙1紙に、ひとつの場面を描くという構成をとっている。第2・3段では、画面下辺に沿うようにして東海道を配し、その路傍に山科地藏堂(図9)を描いている。十禅寺の位置と合わせると、画面の上が北、下が南、向かって右が東、左が西とわかる。第1段には、東海道が描かれていないため、方位を確定しがたいが、第2・3段と大差ない位置に建物や水景が配置されている。場面内では時の進行は表現せず、ほぼ同じ視点から俯瞰したような景観が各段で示されている。これにより長い時を経て変化していく十禅寺の様子が平明に表現されている。

地面には淡く金泥を刷き、すやり霞は水色とする。彩色には顔料を用いるが、厚塗りにはしない。遠山や樹木などは墨のタッチを活かした描写で、画面全体としては淡

い、上品な仕上がりとなっている。山や樹木の表現(前掲図9)は江戸狩野の描法を示しているが、供待ち(図10)や巡礼などの風俗描写からは、中世以来の絵巻などに見るやまと絵の伝統的な風俗表現の学習の痕跡もうかがえる。総じて人物は小さいが、きっちりと属性を描き分けており、柔らかい描線で象られた、頭が大きく手足の細かい人物表現は愛らしさを感じさせるものである。

4 制作背景と作品の位置付け

本作の絵を手掛けた山本素軒は、狩野探幽の弟子の山本素程(生年未詳-1674)の嫡男として生まれた。素程の手ほどきで画を学んだとされ、万治2年(1659)頃には、絵師として活動していたことが『隔蓑記』により知られるが、青年期の記録はほとんど残されていない。貞享2年(1685)に、春宮御所普請奉行に対して下賜された「歌仙御手鑑」(個人蔵)を制作しており、この時期には宮廷の御用を務めていたことがわかる⁷⁾。貞享4年(1687)2月12日には法橋に叙任されており(『亀岡家過去帳』⁸⁾)、その御礼として宮廷に献上された品とされる「琴棋書画図屏風」(京都御所所管)や元禄16年(1703)の東山天皇下賜品であることが判明する「十二ヵ月花鳥図屏風」(サンフランシスコ・アジア美術館蔵)⁹⁾などの大作も知られている。

素軒は当時の宮廷で確固たる地位を築いていたが、その画業の内、本作との関連において特に注意すべきは、元禄5年(1692)に、霊元上皇が明正上皇の70歳

を祝い、多くの貴顕が色紙を寄せた「明正院七十賀月次図屏風」(円照寺蔵)の制作である。これは、延宝3年(1675)の後水尾法皇八十賀に、宮廷絵所預であった土佐光起(1617-1691)が描いた屏風に倣って制作されたものである。現存する同屏風は本作に近い作風で、樹木や土坡は狩野派の筆致で描かれる一方、人物はやまと絵風の柔らかな筆線と丁寧な彩色を用いている。この作風が明正上皇の意に適ったこと¹⁰⁾、また以下に述べる点も考え合わせ、上皇の意向を受けて本作への素軒起用が決まったと見たい。

第3段の詞書には、明正上皇が堂宇の他に、本尊脇侍の不動・毘沙門天立像、二十八部衆扁額など多数の文物を奉納したと記されており、そのほとんどが現存する¹¹⁾。中でも自筆による紺紙金泥の普門品、随求陀羅尼、寺名の勅額とその揮毫本紙、自ら描いた渡唐天神像など、上皇自身が手掛けた品々が多い点に注目したい¹²⁾。また、明正上皇から「かうぎよく」に宛てた消息は11通知られている¹³⁾。いずれも年紀はないものの、その期間は讓位間もない頃から晩年に亘ると推定されており、明暦元年の夢告以後、江曲・江玉ともに長く親密な交流があったことが見て取れる。元禄8年(1695)5月25日の年紀がある「明正院御遺詔御書付」(十禅寺蔵)では、明正上皇は父母である後水尾法皇・東福門院の位牌を含めた11種の持物を、死後十禅寺に納めると遺言している。これらの事柄から、明正上皇の十禅寺とその住持に対する信仰心や思いの深さがうかがえる。

さらに、本作制作の時期について、奥書

には元禄9年5月の年紀があるが、詞書第3段に「すべてほし甲戌にやとる元禄の今年」、すなわち元禄7年(1694)に堂宇をことごとく東方に曳き、境内の再整備が成就したとあり、制作開始は「今年」と記される元禄7年と考えられる。これは『由緒書』からも裏付けられ、まず境内の整備については、

一 同年(稿者注:元禄7年)九月本堂
方丈御曳直シ并御修覆

とあり、元禄7年9月であったことが知れる。これに続けて

一 同年十二月依申上縁起作進可仕旨被
仰付

と記される。上皇による境内整備の完了を大きな区切りとして、元禄7年12月に本作の制作が命じられ、詞書の草稿執筆が始まったと見られるが、同文書には「申上」とあり、本作制作には十禅寺側からの働きかけがあったと読める。一方でこの頃の明正上皇は、この5箇月後の元禄8年5月に十禅寺に宛てた「御遺詔」を遣わし、翌9年4月14日、にわかに発病、病は快方には向かわなかった¹⁴⁾。本作が奉納されたのは『記録』によれば元禄9年8月7日¹⁵⁾であり、その3箇月後の11月10日に上皇は崩御している。本作の制作時期は上皇の最晩年にあたっており、十禅寺への信仰の深さ、厚さを考慮すると、自身の事績の集大成でもある本作の制作に無関心であったとは考えにくい。

本作の奥書を記した裏松意光は「明正院七十賀月次図屏風」にも2首を寄せていることから、上皇との親交が深かった可能性がある。素軒の起用も「明正院七十賀月次図屏風」などの実績を経て、素軒が明正上皇とその周辺から大きな信頼を得ていたとこの証左と思われる。

以上、本作は大作ではないものの、制作の経緯が克明に判明する、素軒の寺社縁起絵の作品であるという点において意義深い。かつ、素軒が最晩年の明正上皇に重用されたことを示す重要な作例としても位置付けられる。また、明正上皇所縁の多くの品々と共に、十禅寺に伝来したという点においても貴重と言える。

なお、十禅寺には本作の下絵が遺されている(図11~13)。田能村氏の論考で紹介されて以降、長らく所在がわからなくなっていたが、今回の指定調査中に寺内で再発見された。損傷が進んでおり、特に詞書料紙の劣化が著しい。かつては、明正上皇の



図11~13 下絵(上から順に第1~3段)

甥である有栖川宮幸仁親王(1656-1699)が詞書を添削したことを記した外題があったと報告されている¹⁶⁾が、現状、失われている。各段の図様の大枠はほぼ本作に継承されるが、細部において違いもある。その様式から、下絵の筆者を素軒とは確言できないが、本作の制作の過程がうかがえるものとして重要であり、一括して附指定された¹⁷⁾。

5 むすびにかえて

十禅寺に所蔵される明正上皇の関連資料は、前述の奉納品にとどまらず、上皇所用と伝える天児・這子などもあり、生前の所縁の深さからその由緒は疑いを容れないと思われる。紙本の作品については、損傷が進んでいるのが惜しまれるが、器物等は比較的良好な状態を保っている。今回は本作の調査に主眼を置いたため、それらについては十全な調査を尽くせなかった。今後の課題としたい。

		縦37.7
見返し		31.0
第1紙	詞1	80.8
第2紙	絵1	94.7
第3紙	詞2	92.8
第4紙	〃	92.1
第5紙	〃	16.8
第6紙	絵2	94.6
第7紙	詞3	75.1
第8紙	〃	93.9
第9紙	〃	46.4
第10紙	〃	42.2
第11紙	絵3	95.1
第12紙	詞4	46.7
第13紙	詞5	81.3
第14紙	奥書	47.2
本紙	総長	999.7

(別表) 各紙の紙幅法量及び詞書・絵対応表

謝辞

本作の調査にあたり、十禅寺御住職小山兼照様をはじめ、京都国立博物館井並林太郎氏に多大なる御高配を賜り、下坂守氏・泉万里氏には懇切なる御指導を賜った。十禅寺什物調査に際しては、京都市歴史資料館井上幸治氏に御協力いただいた。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。

やすい まさえ
安井 雅恵 (文化財保護課 係長 (美術工芸品担当))

註

- 1) 建造物として山科地藏堂1棟、拜所1棟が指定されており、門前の茶所や荷馬の井戸等は、一体として東海道・山科地藏堂文化財環境保全地区に指定されている。詳細については原戸喜代里「徳林庵門前の景観形成と山科地藏堂の造営について」(『京都市文化財保護課研究紀要』第5号、2022年、35～45頁)を参照。
- 2) 指定名称は「紙本著色十禅寺再興縁起〈山本

素軒筆〉1巻。附指定として「紙本淡彩十禅寺再興縁起下絵 一括」。指定名称における〈 / 〉は割書を表している。

- 3) 田能村忠雄「光琳の師山本素軒の画跡 上・下」上：『國華』第787号311～320頁、下：『國華』第788号351～358頁、上・下とも1957年。本作のみならず、山本素軒の画業についても、逐一注記はしないが、多くを氏の論考に拠った。

- 4) 所功「明正上皇と後桜町上皇の宸筆御消息」『モラロジー研究』第86号、2021年、55～71頁。
 - 5) 十禅寺の古文書等の調査については、令和6年10月23日に京都市歴史資料館井上幸治氏の協力を得て、文化財保護課山下絵美・安井雅恵で実施した。
 - 6) 泉万里氏に御教示いただいた。
 - 7) 五十嵐公一「山本素軒の歌仙御手鑑」『塵界』第23号、2012年、3～12頁。
 - 8) 相見香雨「山本素軒並に山本家の歴代を録す」(『日本美術協会報告』第59輯、15～21頁)。
 - 9) 遠藤楽子「山本素軒十二月花鳥図屏風の制作事情—サンフランシスコ・アジア美術館本における近衛家熙の役割—」『MUSEUM』第597号、2005年、7～25頁。素軒の「十二月花鳥図屏風」が東山天皇から京都所司代松平信綱に下賜されたのは、関東下向に際してであり、この時、東山天皇から徳川綱吉に対して「小朝拝・朔旦冬至図」が下賜されたことが『徳川実紀』に記されている。稿者はこの記事から、下賜品の「小朝拝・朔旦冬至図」が茶道資料館所管の土佐光起筆「朝儀図屏風」に該当する蓋然性は高いように思われると述べた(「土佐光起筆『朝儀図屏風』について」(『京都市文化財保護課研究紀要』第6号、2023年、19～30頁)。しかし、久我家文書の「東山天皇下賜品目録」によれば「一、小朝拝絵 一卷〈土佐刑部権大輔光成筆／泥引極彩色、絹地〉 一、朔旦冬至 一卷〈同左近将監光高筆／同〉」(引用は國學院大學久我家文書編纂委員会編『久我家文書』第4巻、1987年、119頁によった。引用に際して常用漢字に改めた)とあり、「小朝拝図」は土佐光成、「朔旦冬至図」は土佐光高(後の光祐)による絵巻であることが明白で、稿者の推測は誤りとわかったため、ここで訂正したい。ただし、時の將軍への下賜品の画題に選定され、光起の子孫が制作している点は、光起の「朝儀図屏風」が天皇家の側近くで制作され、評価を得ていたことを示していると思われる。
 - 10) 明正上皇のみならず、素軒の作風が後水尾天皇時代の宮廷周辺に好まれた背景については、門脇むつみ「後水尾天皇時代の宮廷絵画—描く天皇、皇族と画壇」(野口剛・五十嵐公一・門脇むつみ『天皇の美術史 4 雅の近世、花開く宮廷絵画』吉川弘文館、2017年、155～236頁)を参照。
 - 11) 明正上皇が十禅寺に奉納した文物は、霞会館・埼玉県立博物館『女帝明正天皇と将軍家光 松平信綱とその時代』展図録(1997年)に多数掲載される。
 - 12) 自筆の奉納品が多い点については、前掲註10論文において門脇氏が指摘される、後水尾天皇時代の天皇や皇族の多くが自ら筆を執り絵画を制作するような宮廷全体の文化傾向とも無関係ではないと思われる。
 - 13) 明正上皇の「かうぎよく」宛宸翰消息については前掲註4所氏論文に翻刻が掲載される。図版は前掲註11図録第12図や京都国立博物館『宸翰 天皇の書—御手が織りなす至高の美』(2012年)第112図等参照。
 - 14) 『明正天皇実録』(東京大学史料編纂所データベース「近世編年データベース」、2026年2月28日閲覧)
 - 15) 「同年(稿者注：元禄9年)八月七日御再興縁起御奉納、外題近衛右大臣家近衛家熙公清書日野西参議國豊卿、奥書裏松中納言意光卿繪山本素軒」。前掲註3論文「上」において、田能村氏が引いておられる記録文書は『記録』と思われる。
 - 16) 前掲註3論文の内、「上」参照。田能村氏は、この下絵が裏松家に伝来し、後に同家から十禅寺に寄進されたと推測している。
 - 17) 小稿の内容の一部は、京都文化博物館2025年度総合展示「未来へのおくりもの 京都府×京都市指定文化財」図録(2025年)の本作解説(49頁)において、先行して発表している。
- (図版) 文化財保護課撮影

京北文化遺産センター令和7年度企画展「世界地図を拡げて―大航海時代の京都と山国―」関連企画

座談会「山國神社に伝わる世界地図をひもとく」

鳥居 剛・藤田 明良・村山 弘太郎
山下 絵美 編

開催日時：令和7年8月30日(土)
午後1時30分～3時

場 所：京北文化遺産センター
多目的ルーム

主 催：京都市文化財保護課

協 力：京北文化財調査会

登壇者：鳥居 剛（山國神社宮司）

藤田 明良（天理大学教授）

村山 弘太郎

（京北文化財調査会代表・
京都外国語大学教授
／コーディネーター）

[山下] みなさんこんにちは、本日は暑いなかお越しくださいませありがとうございます。京都市文化財保護課で文化財保護技師をしております山下と申します。本日は司会を務めさせていただきます、よろしくお願ひします。本日は、展示室で開催しております「世界地図を拡げて」という展覧会¹⁾〈図1〉の関連行事として、座談会を開催することになりました。展覧会の主役は、山國神社に伝わる2枚の世界地図になります〈図2・3〉。こちらの世界地図は、令和7年（2025）3月に京都市の指定文化財になりました²⁾。

文化財指定や、指定に向けての調査は、京北の皆さんのお力をお借りして実現することができました。その成果を、ぜひ京北の皆さんにご報告できたらという思いで、今回の座談会を開催させていただきました。本日は、指定にあたり大変お世話になりました先生方にお話をいただきます。ここからは、コーディネーターの村山弘太郎先生に進行をお預けしたいと思いますので、村山先生よろしくお願ひいたします。

[村山] 本日は暑い中たくさんの皆様にお集まりいただきましたこと、感謝申し上げます。今回の座談会のコーディネーターを務めさせていただきます、京都外国語大学の村山弘太郎と申します。まず、今回の登壇者の先生をご紹介させていただきます。山國神社宮司の鳥居剛先生です。もうひと



図1 展覧会「世界地図を拡げて―大航海時代の京都と山国―」チラシ



図2 異国渡海船路積図 山國神社蔵



図3 大明地理之図 山國神社蔵

方、今回の地図につきまして非常に多く調べていただきました、天理大学の藤田明良先生です。わたしはコーディネーターを務めさせていただきます、京北文化財調査会の代表も務めさせていただきます。京北文化財調査会とは何ぞやということなんですけれども、今回のこの2枚の地図、こちらの文化財指定をかけようということで、京都市さんと一緒に研究者が集まって結成した調査会になります。第一の目的は文化財指定ということで、それを達成することができたわけでありますけれども、ここで解散というわけではございませんで、この京北地域に伝わる様々な文化財に光を当てて普及していく、皆さんに知っていただくというような活動を続けていけたらよいかなあというように考えております。

文化庁でも、文化財はこれまでの「とっておいた文化財」というふうな表現から、「とっておきの文化財」ということで、文化財の普及啓発活動にも力を入れていっておりますので、そういったところのお手伝いのできたらと考えておりますので、引き続きこの地域に眠る、まだ光が当たっていない、非常に重要なお宝が眠っているかと思っておりますので、こういったものの調査あるいは活用、保存も含めてお手伝いできたらいいかなというふうに考えております。

その第一弾としまして、先ほどから申し上げておりますように、2枚の地図、原寸大のレプリカがそちらの展示室にもございますので、まだご覧になってない方はぜひご覧いただきたいと思うんですけれども、こちらの地図につきまして、天理大学の藤

田先生にしっかりと調べていただきました結果、いろいろな来歴、なぜここに残っているのかというようなところが明らかになって参りました。この辺りにつきまして、先生からお話を伺い、そして鳥居先生からは、どのように地図と山國神社が関わってこられたのか、鳥居先生の視点からお話をいただきたいと思っております。では早速でございますけれども、鳥居先生よろしく願いいたします。

[鳥居] そうしましたらわたしの方からは、山國神社〈図4〉では、この地図を今までどのように扱ってきたか、文化財になるとは全く思っていませんでしたので、文化財指定を受けたときにどのように思ったかということ、まずはお話したいと思います。それから、今日おいでになった方は、ほとんどは山国の方だと思いますけれども、山國神社についてというテーマでもありますので、最後に少し山國神社のことを紹介して終わりたいと思っております。

まずこの地図なんですけれども、「異国いこくとかいせんろつもりずとかいせんろつもりず渡海船路積図」は畳半畳くらいの大きさです。「大明地理之図」は四畳半ぐらだいみんちりのずいの大きさで非常に大きい。山國神社では、各町から2名ずつ2年間、総代を務めるんですけ



図4 山國神社

れども、そういったことをしてきていただいた方がたくさんいらっしゃって、そういう方が山國神社にいるうちに、藤野前宮司が年に1回くらいは虫干しをしようということで、「大明地理之図」を毎年蔵から出して虫干しをしておりました。その頃は珍しいものだとか、日本に何枚しかないとか、他に持っておられるのはどういうところだとか、そういったことは全く考えておりませんでした。山國神社の蔵の中には棚がちゃんと作ってありまして、もともとは小さく折り畳んで、箱に収めて蔵に入れておりました。「異国渡海船路積図」ですけども、わたしが最初に聞いたのが、藤野前宮司から、東京大学史料編纂所から、昔に模写をした図をアーカイブしてインターネットで公開するので了承して欲しいという手紙が来たということでした。山國神社では「異国渡海船路積図」は、それまで見たことはありませんし、ちょうど同じ頃だと思えますけれども、藤田先生からは、山國神社にこういう地図があるはずだから、今でも見れるかというような趣旨の問い合わせが来ていたのを覚えています。でもそれは見つからないから、今はありませんというふうに返事した、ということを藤野前宮司はおっしゃってました。先ほどの東京大学史



座談会会場風景

料編纂所の件ですけれども、昭和のはじめ頃に模写をされて、長いこと向こうの蔵に入っていたんだと思います³⁾。

その後、ないと言っていたものが山國神社の蔵にありました。どうやってわかったかということ、坂田聡先生という中央大学の先生が長く山国荘のいろいろなことを調べておられましたけれども、その先生が作られた山國神社の古文書の目録⁴⁾の中に「異国渡海船路積図」のことが書いてあったんですね⁵⁾。たくさんありますから、目録に書いていただいても、ここにありますと言われないとなかなかわからないんですけども、目録を調べましたら確かに書いてあって、番号も振ってありますので、蔵に入ってみたら、いろいろな古文書の間折り畳んでありまして、大きいままではありませんのでわからないんですが、出てきました。

その頃とあわせて、皆さんも覚えておられるかもしれませんが、令和元年頃に山国荘の研究発表会が京北出張所でありました⁶⁾。その頃に山國神社でこの2枚の地図が発見されると京都新聞に載ったんですね⁷⁾。わたしたちにしたら発見と言うより、とくに「大明地理之図」は前からあったし⁸⁾、確かになくなったものが見つかったという意味で発見かもしれないけど、そういった認識はあまり持っていなかったんですけど、新聞に載りました。

新聞に載ったことで、藤野前宮司が「ひょっとすると誰かが蔵を破りに来るかもしれない、そのうちになくなってしまうと困る」という話がありまして、どこかに預けようと。それで京都府さんと京都市さ

んに預かってもらえるかという話をしましたところ、京都市さんが預かって構いませんということをごさったので、現在は山國神社ではなく、京都市歴史資料館に預かってもらってます。預けてしまいますと山國神社で見ていたように見るわけにはいかなくて、見ようと思うといういろいろな手続きが必要になるんですけども、今申しましたように、神社に関係していたものはですね、文化財になるとか、重要だとかあんまり思わずに、虫干しをしていたことを覚えてます。

去年の冬に、京都市歴史資料館の収蔵庫から地図を出してきて、そのときに美術専門の業者さんがいらっしゃって、地図を広げてくださるんですけども、実に丁寧なんです。その広げ方にびっくりしてしまって、こういうふうに広げないといけないのかと。それから比べたら山國神社では随分いい加減なこととしていて、ちょうどいい時期に預かっていただけたなど。なかなか実物を見ることはできませんけれども、こういった意味では安心だなというふうに山國神社では思っております。地図についてはわたしの認識はそういうことです。たまたまその時期が、わたしは平成23年(2011)から28年までの6年間、山國神社の総代をしておりました。そのあと神職の資格を取りまして、28年以降は権禰宣、令和2年(2020)から宮司をしてございますが、そういったようななかで見聞きした地図についてお話をさせていただきました。

また遠くからおいでになっております方もあるかもしれませんので、山國神社のお

話をしますと、この山國の里は山國莊ということで、奈良にある長屋邸跡(奈良市二条大路南)から出土した木簡に山國の里と書いてあって⁹⁾、山國のことが書かれたもので一番古いんじゃないかと思います。だいたい奈良時代のはじめ頃ですかね。その後、山國神社が創建されたのがだいたい770年から780年頃、奈良時代の終わり頃に創建されています。その後に、ちょうど皆様もNHKの大河ドラマ「光る君へ」がご記憶にあるかと思いますが、源氏物語の書かれた時代に、正一位という地位を三条天皇からいただいています。三条天皇は目が悪くて、山國神社に願をかけて、目の具合が治ったので、山國神社は正一位を賜ったということが伝わっています。山國神社を拜むのに目が悪いからということは、もう今は誰も思わないのかもしれませんが、実はそういうようなこともあって、正一位という地位を賜ったそうです。それから平安時代の中頃ですけども『延喜式』(「延喜式神名帳」)というものが書かれてるんですけども、山國神社は式内社ですので、この中にも山國神社らしき名前が出てくるということで、多分これが山國神社だろうと言われておまして、かなり古くから歴史の中に少しずつでも名前が出て



鳥居剛氏

きている神社でございます。山國神社の紹介をさせていただきました。わたしの方からは以上です。

[村山] ありがとうございます。続きまして藤田先生よろしく願いいたします。

[藤田] 皆さんこんにちは。大和の国から来た藤田でございます。早速ですが資料を1枚用意していただきましたので、その資料とスクリーンを見ながらお話を聴いていただけたらと思います。「山國神社に伝わる2種の世界地図の位置づけ」というタイトルを付けましたが、2種類の世界地図というのは、先ほど紹介のあった「異国渡海船路積図」という、京都市が文化財指定をするにあたって付けた名前の図です。わたしたちは下に書いてある貿易に関する情報に注目したので、ぼうえきじょうほうぶんつききゅうせかいず「貿易情報文付旧世界図」ということもあります。それからもう1枚が「大明地理之図」、中国の明朝ですね、日本でいえばだいたい室町時代から江戸時代のはじめにかけて続いた王朝ですけれど、その時代の中国を描いた図であります。

それではまず、わたしがどうしてこの地図と関わったのか、どうして出会ったのかというお話を簡単にしておきたいと思えます。いま大学の学問研究は、ひとつの大学だけではなくて、いろいろな大学からメンバーを集めて、まざり合っているのが主流となっています、共同研究ですね。この2枚の地図には3つのチームが関わっています。ひとつは東大チームと書きましたが、東京大学の先生が代表になって、史料編纂所というところから補助金をもらっ

て行った共同研究プロジェクトです。わたしもそこに研究分担者として入っております。これはおもに「貿易情報文付旧世界図(異国渡海船路積図)」を研究しております。

もうひとつは、「大明地理之図」の研究を始めていた東洋文庫チーム。東洋文庫は東京の駒込にある、岩崎弥太郎が出資して設立した東洋の歴史文化の研究を専門にする研究機関で、博物館も併設しています。それからもうひとつが先ほどお名前が出た、坂田聡先生を中心とする中央大学のチームです。これが「山国荘調査団」という名前で、地元に残っている古文書を懇切丁寧に調査して目録を作りました¹⁰⁾。わたしは東大チームの一員として、この系統の地図の所在を確認しておりましたので、山國神社にも聞いたのですが、先ほどのお話のように、当時はそういう地図は見当たらないということで、所在不明と報告書に書きました。その報告書を印刷物にするときに、史料編纂所の編集者から「隣の机の人が、“この地図、坂田先生の文書目録に載っていたような気がする”と言ってますよ」と電話があって、早速中央大学チーム作成の目録を取り寄せて調べたら、山林争論の図が入っているところにこの地図が収まってお



藤田明良氏

りました。それで翌年の平成30年(2018)に、東大チームと中大チームが合同で、この地図の存在を確認し、「再発見」にいたり、それが先ほどの京都新聞の記事にもなりました。

さらに東洋文庫チームには、わたしの名古屋大学の学生時代の先輩がおりました。たまたま会ったときに、こういう地図を最近見たんだという話をしたら、「それは自分たちが今探している地図だ」ということになって、それで東洋文庫チームも調査に合流して、一緒に研究してきました。ですからこれからの話は、わたしが調べたというよりも、この3つのチームが力を合わせた成果の一部を紹介するということになります。

次に、「異国渡海船路積図(貿易情報文付旧世界図)」のことを簡単に紹介しておきます。地図の部分と、その下に文字情報が入っていて、地図はわりと簡単な地図なんですけれど、文字情報が大変詳細で、しかも本を読んだりして情報を集めたのではなくて、自分で見てきたような非常に生々しい情報が入っている。これを最初に分析した歴史研究者は、「実際に朱印船貿易と関わったことのある人物でないと書けない情報だ」と表現しました。

配布した資料に、わたしたちが調査して現在所在が分かっている13種類の「異国渡海船路積図(貿易情報文付旧世界図)」を表にしております<図5>。同じ地図といっても微妙な違いがあるので3つのグループに分類しました。Aグループは簡単に言うと、地図は簡略だけれど文字情報が詳しいというものです。これに対してB1グルー

プは、逆に文字情報の方は省略が多くて、地図の方はより新しい詳細な地図になっているというものです。さらにB2グループは、内容はB1と同じですが、1枚の地図ではなくて屏風に仕立ててあり、中央に地図があって、両端に文字情報が分かれているというタイプです。この13種類の地図は全てオリジナル(原本)ではなく写本(模本)という写しです。山國神社に伝わってきた地図は、そのなかでも模写年代が一番古いものです。しかも他の所蔵者を見てもらうとわかるように、大学図書館だとか、博物館だとか、総持寺は横浜にある曹洞宗の大本山ですが、そういう大きなお寺や博物館・図書館が所蔵しているもので、こちらのような閑静な山あいの神社に、このような地図が伝わっているということはいへん驚きました。

もう1枚の地図は中国を中心に東アジア全体を描いた巨大な「大明地理之図」です。これは、浅井周伯(1643-1705)という医師¹¹⁾が京都の「御幸町錦小路上ル町」で開いていた私塾「養志堂」がこの祖本にあたるものを所蔵していたということが、この地図に載っている文字情報からわかります。ただし、その養志堂は後に火事で焼けてしまうんですね¹²⁾。そのときに養志堂の地図が救出されたかどうかは分かっておらず、現在は所在不明です。その養志堂の地図を源流とする写本が8点残っており、表のようになります<図6>¹³⁾。やはり山國神社の地図が一番古く、「延宝9年(1681)に作成された養志堂所蔵の地図を元禄3年(1690)に、模写した」という文字情報が載っています。その次は東京大

所蔵先	摘 要	分類
① 山国神社本	貞享2年1685の写本 東京大学史料編纂所にこの地図の1936の模写本が所在	A
② 古河市本	元禄4年1691の写本を天保7年1836に古河藩家老の鷹見泉石が大阪で模写	A
③ 横浜市立本	大学図書館「鮎川信太郎文庫」所蔵 1918に東洋学者が古書店で購入	A
④ 山口大学本	図書館「棲息堂文庫」所蔵 徳山藩主毛利元次(1690～1716)旧蔵	A
⑤ 神戸市博本 a	博物館「南波松太郎旧蔵コレクション」所蔵 原名「芭蔵世界図」	A
⑥ 白杵市本	白杵藩主稲葉家旧蔵 「異国之図」として同じ地図が2点存在	B 1
⑦ 国会図書館本	絵図集『古城及古戦場図』の第32冊中に所在	B 1
⑧ 総持寺本	原名「南瞻部世界図」 東京大学史料編纂所写真本・模写本あり	B 1
⑨ 佐賀県図本	県立図書館「蓮池鍋島文庫」所蔵。原名「世界図」	B 1
⑩ 神戸市博本 b	博物館「南波松太郎旧蔵コレクション」所蔵 原名「旧世界図(仮)」	B 1
⑪ 石橋五郎本	京都帝大石橋教授所蔵 戦災で焼失 秋岡武次郎氏撮影の写真残る	B 1
⑫ 岡山県博本	原名「旧大陸図屏風」 旧御津町金川の日蓮宗妙覚寺より寄託	B 2
⑬ 堺市博本	原名「世界図屏風」 旧堺市中之町の河盛家旧蔵 日本図とセット	B 2

図5 「貿易情報文付旧世界図(異国渡海船路積図)」一覧

	所 蔵 機 関	題 名	縦×横	模写年代、模写者、旧蔵者など
1	京都府山国神社	大明地理之圖	284.5 × 365.0	元禄3年1690に養志堂所蔵の延宝9年1681の図を模写
2	東大東洋文化研究所	大明地理之圖	288.0 × 358.2	貞享3年1686に養志堂で模写。元禄3年1690に再捕写
3	天理図書館	大明地理之圖	277.0 × 346.0	元禄7年1694に延宝9年の図を模写
4	国立ギメ東洋美術館	明朝地理之圖	300.0 × 380.0	宝暦12年(1762)に常照寺で周山の村山光衆が模写
5	中央大学付属図書館	大明地理之圖	298.2 × 382.8	文化7年1810に馬杉玄鶴が模写。地理学者青野壽郎旧蔵
6	公益財団法人東洋文庫	大明地理之圖	344.8 × 360.8	文化11年1814に山形の医師細矢玄俊が京都で模写*
7	デンバー美術館	大明地理圖	289.5 × 355.6	延宝9年の図を模写。岩倉具視旧蔵。
8	宮城県図書館	大明地理之圖	不詳	元禄7年1694模写。仙台藩土山家豊三旧蔵

*2014年に細矢家から東洋文庫に寄贈

図6 「大明地理之図」一覧

学の東洋文化研究所が所蔵しているものになります。最初に模写したのは山國神社の地図よりもちょっと古い貞享3年（1686）なんですけれど、再補写とって、元禄3年にもう一度描き直してるんですね。だからやり直してないものとしては山國神社のものが一番古いことになります。ちなみにわたしの所属する天理大学の図書館も同じタイプの写本を所蔵しています。

また後で紹介しますが、外国の美術館も所蔵しているんです。フランスのパリにある、ルーブル美術館に次ぐくらいに有名な、ギメ東洋美術館というところがあります。ここが所蔵しているんですね。それからこれはちゃんと調査できていないんですけど、冬季オリンピックがあったアメリカのデンバーにある美術館も所蔵しているそうです。だから山國神社以外は、大学図書館だとか、世界的に有名な美術館だとかそういうところが所蔵していることになります。

ではどうして「大明地理之図」が山國神社に伝わったのか。これは少しずつ分かってきています。明治7年（1874）、幕末から明治に入って少し落ち着いた頃です。このときに村の体制も、中世以来続いてきた八ヶ村あるいは十ヶ村の名主の連合体が村を自治的に運営するという体制から、近代的な大区小区制という地方制度に変わっていく時期なんですけれど、それまでのあいだ、高田寺というお寺に収められていた山國郷の名主の諸道具を売り出します¹⁴。先ほど現地に行ってきたんですけれど、御霊神社の神宮寺だったんですね〈図7〉。高田寺には八ヶ村あるいは十ヶ村の名主たちの

共有財産を収める宝蔵がありました。高田寺の宝蔵は幕末に洪水で被害に遭ったのですが、そのときに救出されたものは御霊神社の本殿と拝殿に納められているんですけど、それを新しい村の体制をスタートさせるために、一旦お金に変えるということになります。お金に換えるといってもよそに売るんじゃないくて、名主たちのなかで比較的ゆとりがある、お金のある人たちが自分たちでお金を出して、村の費用のためにそれを買い取るという形にしました。そのときにこの2枚の地図ですね、1枚は「万国図巻軸」と出ています。これは誰が買ったかということ、山國神社の宮司であった辻村の藤野齋さんが買いました。もう1枚は「残りもの」というなかに、「万国地図面巻枚」というのがありまして、「万国図巻軸」というのが小さい方の「異国渡海船路積図（貿易情報文付旧世界図）」、「万国地図面巻枚」が大きい方の「大明地理之図」だと考えられています。おそらく藤野は大きい方は買っても手に余るから、小さい方だけ買ったんだと思います。ちなみにこのとき



図7 御霊神社に建つ石碑
「元高田寺境内 比賀江小学校跡地」

「万国図壺軸」をいくらで買ったかという
と「式歩式百文」、現在の価値に直すと4万
円前後です。このとき藤野は大きな徳利
（「大徳利」）、お酒を実際飲むのではなくて
床の間に飾るものだと思うんですけど、
大きな徳利も「壺両壺歩」、10万円前後で
購入しています。ちなみにこのときの最高
購入額は、釣燈籠（「釣燈籠大」）の「三両
式朱」、約25万円ですね、これは溝口畔右
衛門さんという人が買っています。会場に
溝口さんいらっしゃいますか。畔右衛門さ
んの系統でしたら、もしかしたら今でもお
宅にあるかもしれませんね。以上のことから、
それまでは名主たちの共有財産のなか
にこの2枚の世界地図はあったということ
になります。江戸時代の村で世界地図を共
有財産として持ってるなんてことは聞いた
ことがありません。すごい村だと思います。

もう一つ、その証拠があります。この話
から約100年さかのぼった安永4年
（1775）、江戸時代後半ですけど、八ヶ
村の名主たちが高田寺の寺宝を改めて目録
にしたのです。そのなかに書物についての
目録があって¹⁵⁾、そこに「貞享二年丑 元禄
三年午年 一 万国地図 大小二枚 但シ
大明地理図」と書かれています。もうひと
つの名前は書かれていないのですが、貞享
2年と元禄3年という模写年が書いてある
ので、確実に「異国渡海船路積図」と「大
明地理之図」のことです。この時期には共
有財産として名主たちが所有していたとい
うことがわかります。この財産目録は20
年くらいに一回作るのですが、この一つ前
の宝暦3年（1753）の目録¹⁶⁾にはこの2

枚は見えません。ですから1753年から
1775年のあいだに共有財産に入ったとい
うことになります。

では、この山国神社文書に登場するこれ
らの地図に関する一番古い情報はいつかとい
うことですが、それは安永4年の財産
目録の10年前になります。明和3年
（1766）年3月に「山国五社明神」、これ
は山国にあった5つの神社をまとめた神
社、つまり今の山國神社で大規模な能の興
行があり、2日間で4000人が集まったと
されています。能は神社境内に舞台を作っ
て神に奉納するのですが、同じ期間に隣接
する山國神社の神宮寺本堂で、10名のお
坊さんによる「十座十万遍之修法」という
特別な法要が挙行され、こちらもたくさん
の人が参集しました。山国神社文書の中に
この時の費用や出来事を書き上げた記録が
あります¹⁷⁾（図8）。そこに、この法要の間
「院の座敷に大明四百余州之地図を掛け、
参詣の輩に拝見せしむ」という記事があり
ます。つまり、神宮寺の書院の座敷に、参

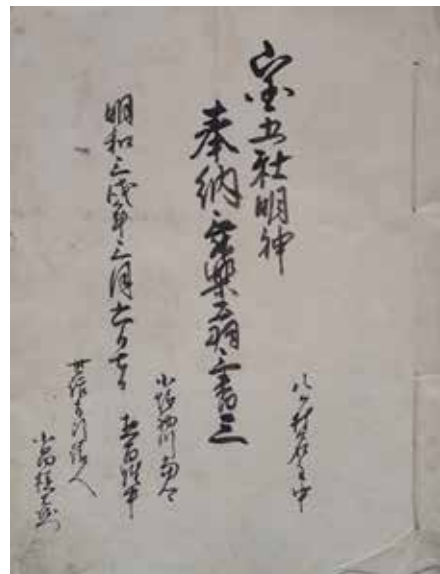


図8 山国神社文書のうち『一宮明神奉納御能舞
台地図諸入用勘定目録并諸色訳書』

詣に来たお客さんたちに見てもらうために「大明四百余州之地図」を展示したのです¹⁸⁾。この「大明四百余州之地図」は確実に「大明地理之図」ことだと考えられます。

さてその一方で、この「大明地理之図」は、山国郷の別のところにあったということもわかってきました。先ほどふれたギメ東洋美術館にある「明朝地理之図」で、東洋文庫チームのメンバーがパリまで調査に行きました。地図名は「大明地理之図」とやや違っていますが、地図は同じものです。この地図は折本といって小さく折り畳める体裁なのですが、表紙にあたる部分に地図名と、誰がいつ作成したかなどの情報が書いてあります。まず、最後に署名している「丹波州周山医生容軒村山光衆」、すなわち近くの周山で医業を営んでいた村山光衆（容軒は雅号）が作成の中心人物で、署名の上の「宝暦十二年（1762）九月朔（1日）」が完成日ということになります。そして冒頭には「大雄大山」すなわち大雄山常照皇寺が「明朝地理之図」を文庫に所蔵していることを知って、近所の小島氏を誘って模写をはじめたこと、老いた自分たちだけでははかどらないので、「童蒙（若者）」も使って写したため、不正確さがあるかもしれないというようなことが書いてあります。

村山光衆たちが模写した常照皇寺の「明朝地理之図」と、山国郷の名主たちの共有財産となっていた「大明地理之図」は、同じモノだと考えるのが自然だと思います。つまり、宝暦12年（1762）までは常照皇寺にあった地図が、その4年後の明和3年（1766）までの間に、名主たちの共有財産

となっていたのです。安永4年（1775）の財産目録では2枚の万国絵図がセットで登場するので、もう一枚の「異国渡海船路積図」も同じ時期に常照皇寺から名主たちの共有財産に移った可能性が大きいと思います。山國神社にある地図のコピーが、今フランス・パリの世界的に有名な美術館に所蔵されているんですよ。すごいことだと思います。

ではなぜ常照皇寺が2枚の世界図を所蔵していたのか。江戸時代は常照寺と呼ばれていたの、ここでは常照寺と呼ばせてもらいますが、わたしには、この人がキーパーソンだろうと思う人がいます。それは、常照寺第13世住持これいどうじゅうの古靈道充（1628－1704）です〈図9〉。皆さんのなかで、常照皇寺の檀家だという人がいたら手を挙げていただけますか。結構いらっしやいま



図9 古靈道充像 常照皇寺蔵

すね。山國に昔からお住まいの方は、こちらの檀家になっている方が多いと思います。この常照寺は非常に格式の高いお寺で、創建したのが光嚴法皇（在位1331－1333）です。南北朝時代の北朝の最初の天皇が出家して法皇になって、このお寺を開いたということになります。そして、光嚴天皇の御陵（光嚴天皇 山國陵）や後花園天皇（在位1428－1464）の御陵（後花園天皇 後山國陵）も裏山にあるわけですね。常照寺は臨濟宗天龍寺派に属する寺院ですが、天皇家の人物が創建したということで別格扱いのお寺でした。ですから室町時代は、天龍寺派のなかでも偉いお坊さんが住職として来ていたようなんです。ところが、その頃の史料が全く残ってないんです。なぜかというと、明智光秀が丹波国を平定したときに、その軍勢が寺社を焼いたり土地を奪ったりしたのです。それで常照寺も焼かれて一旦途絶えてしまいます。だから、中世の記録が地元では残ってないですね。

しかし、江戸時代に入って常照寺も復興が始まります。慶長年間に後陽成天皇（在位1586－1611）が、領地を常照寺に与えるように徳川家康に頼んで、所領が復活し、燃えてしまった建物も少しずつ復興されていきます。最初にその復興の中心になったのは、山國郷下村の水口家出身の雲室周祥うんしつしゅもようというお坊さんです。この人は臨濟宗の僧侶としては結構出世していて、前任地は鎌倉の円覚寺だったんですけど、復興のために呼び戻されます。そして、地元の名主たちと力を合わせながら復興していくわけですね。そして、お寺の伽藍も

揃ってきたというところで、天龍寺の塔頭延慶院で修行をしていた古靈道充が13世、復興後でいえば4代目の住持として迎えられたのです。20歳前後で住職になって、そのあと57年間、76歳で亡くなるまで常照寺住持を務めます。この人物は、江戸時代の常照寺の歴史の中では傑出した住職だと思います。彼には3つの大きな特徴があります。

1つ目は、朝廷との絆をしっかりと繋げたということです。彼が住職のあいだに大規模な朝廷関係の法要が2回ありました。1回目は光嚴院三百年忌（寛文3年〈1663〉）。2回目が後花園院二百年忌（寛文10年〈1670〉）。その度に常照寺はたくさん寄附をもらっているわけです。それから、彼の時から常照寺の住職は、天皇や皇族の葬儀にお経を読む役として京都に向かっています。彼が亡くなった後も天皇家関係の葬儀があると、常照寺の住職が必ず出仕することになっています。

2つ目は、先ほども言ったように戦乱とともに燃えてしまった戦国時代以前の常照寺の輝かしい歴史を、何とかまとめようしたことです。寛文4年（1664）、彼が40代の時、『大雄山常照禪寺考略』という、中世以降の常照寺の歴史を復元した書物を完成させました。その序文に、寺の日記や古文書は戦乱でなくなってしまったけれど、天龍寺の古文書には時々出てくるし、村の古老の言い伝えも残っているから、そういうものをかき集めてこの本を作ったと書いています。そういうすごく地道な作業を成し遂げたんですね。

しかし何と言っても、次の3つ目の特徴

です。彼は当時の日本の禅宗界を代表する秀才でした。天龍寺派第一の秀才、臨濟宗でも第一の秀才と呼ばれているんです。そして、彼は臨濟宗の中で学問の才能でどんどん出世していくんですね。延宝元年(1673)、50代ですけど、臨濟宗内でも格式の高い鎌倉の円覚寺の住職になっています。そしてその10年後の天和2年(1682)には、「五山碩学^{ござんせきがく}」という地位に就きます。これは臨濟宗の五山のお坊さんの中で、特別に幕府から毎年100石分(金100両)の給料がもらえる、今で言うと年金が支給される文化功労者みたいなものです。そして、その2年後の貞享元年(1684)に以酌庵^{いていあん}の住持という特別な職に任命されます。以酌庵は朝鮮に近い対馬にあるお寺ですが、単なるお寺ではなくて幕府の外交機関でした。朝鮮から使節が来る時に、まず必ずこの以酌庵で予備交渉をするんです。そのときに、外交文書を作成したり、相手の文書を読解したり、相手と交渉する責任者が以酌庵住持なのです。対馬まで行くのは大変ですけど、これは禅宗界でもとりわけ格式の高い名誉ある役職でした。ですから彼は、当時の禅宗界では本当に一・二を争う学識を持っていた人物なんです。

わたしはこの地図の来歴について重要だと思うのは、2つの地図が模写された年代が、彼が常照寺の住職だった時代に収まるんですね。常照寺に2枚の世界図の模写本が入った、あるいは模写させてそれを常照寺が所有するようになった。このことは、彼の存在抜きには考えられないと思います。単なる仏教の勉強だけではなく、外交

もやったわけですから、彼は当時のアジア、中国を中心とした東洋世界の知識についても強い知的関心を持って、いろいろなものを収集したのではないのでしょうか。それらを身近に置こうと思ったら、カメラやコピー機がない時代は書き写すしかない。自分ができない場合は、お金を払って誰かに頼んで書いてもらうしかないわけですが、彼には碩学料という安定した収入もありました。このような事情で、この2枚の世界図が常照寺に入ったんじゃないかなと思います。

それでは、どうして常照寺から山国郷の名主たちに所有権が移ったのか。これはまだわかりません。それがわかる史料がないかということで、去年8月に2日間、常照寺の古文書の調査・撮影をしました¹⁹⁾。その後、1年間かかってようやく先月、撮影した史料の整理が終わりました。これから本格的に読んでいく段階なんですけど、撮影した画像を整理しながらざっと見たところでは、直接この世界図のことについて書いてあるようなものはないように思いました。でも、よく読み込んでいけば関係する情報があるかもしれません。それは今後のお楽しみということで、わたしの話はここまでにさせていただきます。

[村山] ありがとうございます。非常に熱のこもった、いかに重要な地図であるかということのを再認識させていただいたのではないかなと思います。一旦ここで休憩を取らせていただきます。

[村山] ここからは、先生方にいただいたお

話をもとに、座談会的に進めさせていただきたいと思います。今回のこの世界地図について、「大明地理之図」に関しては鳥居先生も総代さんたちも昔からご存じだったということだったわけですが、鳥居・藤田両先生からのお話の中にもありましたように、もうひとつの世界地図「異国渡海船路積図（貿易情報文付旧世界図）」が一時行方不明というか、どこにあったのかわからなくなっていたのが再発見されて新聞報道された。その結果、このまま置いておいたら、お宝であるからこそ、蔵破りの可能性があるということで、今は京都市歴史資料館に預けておられるというお話だったわけですが、その見立てはどうも間違っていたらしいと。こうした文化財はわれわれも調査して言われるんですけども、いくらで売れるかとか、値打ちなんぼかと聞かれるんですけども、ほとんど値打ちはございません。いわゆる古文書類は、昔は目方で売られていました。1点いくらではなくて、まとめて1キログラム千円とかで売られていました。その中から価値のあるもの、例えば徳川家康の書状とかが出てきたら売れるんですけども、大多数は売れません。売れないんですけども、なかにはこのように金銭的価値がつき



村山弘太郎氏

そうなものもあるんだということで、文化的価値と金銭的価値の両者が絡み合っているもの、それが今回のこの2枚の世界地図ということですが、鳥居先生にお伺いしたいんですけども、総代さんになられて初めて「大明地理之図」を虫干しされたとき、どのようにお感じになりましたか。

[鳥居] そうですね、最初に見たときに、どうして山國神社にあるのかと。まず藤野前宮司に聞きました。そしたらわからないと。先ほどもありましたように、藤野さんの先祖の齋さんが、どうも残った地図をまた買われたということらしいので、そういったようなことだったんでしょう。わたしはそのときには、山国隊を出している土地ですので、おそらく明治維新の前後ぐらいの頃に、そういう機運のある場所に来られた方が、山國神社に寄贈したんじゃないのかなあと。でももうそれすらわからなくなってしまったんだろうくらいに思っていました。だから江戸時代の中頃に模写されて、常照寺に入って転々としてきたというようなイメージは全く持っていなかったです。外の人が持ち込んできたのだとばかり思っていました。

[村山] そうですよ、やはり外から山国に入ってきたというふうに考えるのがわかりやすいかと思います。幕末にどんどんと外に開いていくのがこの地域ということだったと思いますので、それで奉納されたというふうな形だと思われていたのが実はそうではなくて、はじめからここに用意された

ものだった。この地域、地域といいますかひとりの僧侶がこれを求めたということなんですけれども、その辺りについて藤田先生、何かもう少し追加でご説明ありましたら、古霊道充という僧侶はどういうふうな感じで外を向いていたのでしょうか。

[藤田] この人は秀才なんですけれど、いわゆるクールな秀才ではなくて、熱い秀才なんです。学問の世界に閉じこもるわけでもないし、日本一になってやろうというような上昇志向だけではなく、地域のこと、自分が住職になった常照寺のある山国郷のこともいろいろやっていた。朝廷との絆を強めたり、失われた歴史を復元したりとかで、頑張った人でもあるんですね。だから彼が天龍寺派最高位の天龍寺住持に就任したときには、山国の檀家さんたちが祝賀の催しをしているように、山国の名主さんたちともいろいろ交流があったのではないかと思います。常照皇寺に世界図があるという情報は、周山の村山光衆が持っていたぐらいですから、地元の山国の名主さんたちも、実際に見たかどうかわかりませんが、道充さんの集めた外国のことが分かるいいものがたくさんあるらしい、ぐらいのことは知っていたんじゃないかなと思います。

[村山] ありがとうございます。そうですね、すごくいいものがあるからこそ、周山の村山氏がそれを写したということになるかと思います。今のお話で、とくに朝廷との関係をしっかり築こうとしたということで、それは今でも痕跡が残っております。

わたしも去年の常照皇寺での調査に付き合わせていただいたんですけども、蔵のなかを拝見しますと、菊の紋章が付いているものが結構あるんですが、菊の紋章の使用が明治2年(1869)から昭和22年(1947)まで法律で禁止されていました。近代は天皇制の時代ですから。だけれどもあれだけちゃんと残しておられたということを考えますと、やはり相当強い朝廷との関係をこの時代に持たれていたんだろうなというふうに考えられます。それでこの村山氏というお医者さんが「大明地理之図」を模写したわけなんですけれども、これは藤田先生、残っているものはどこも同じぐらいの大きなものということですね。

[藤田] だいたい同じです、10～20センチメートルぐらいの違いはあってもだいたい同じサイズですね。

[村山] かなり大きいですね。村山氏の写したものの話を伺っていると、何人かで写したということかと思うんですけども、山國神社さんが所蔵されておられる地図の実物大がそちらの展示室にもございますので、ぜひ後ほど見ていただきたいんですけども、本当に大きいです。四畳半ぐらいありますので、ああいったものはどうやって写すのか、あるいは作成するのが非常に気になるんですけども、この辺りに関しましては文化財保護課の絵画担当の方がおられますので、何か知見ありますでしょうか。あれはどうやって写したんですか。

[安井] 文化財保護課で美術工芸品の絵画の担当しております安井と申します。これは紙をある程度の大きさまで継いで写しているとは思いますが。絵具が紙継ぎの上ののっている部分があるので、何分割かしたものを最後に貼り合わせて大きい面積にしていると思います。

[村山] なるほど、模写もおそらくそういう形で作られるだろうと考えてよろしいでしょうか。やはりオリジナルは養志堂ということで、これは藤田先生まだ確認されていないんですね。

[藤田] そうですね、残っているかどうかもわからないですね。

[村山] 一遍火事に遭っているので残っていない可能性があるんですけども、そこから写されたかなり古い段階のもの、オリジナルに近いものだろうと評価してよいかと思うんですけども、これのさらにコピーが、世界的に有名なギメ東洋美術館に入っているということなんですけれども、ご所蔵されているもののコピーが、フランスの有名な美術館に入っているというのは、鳥居先生どうお感じになられますか。

[鳥居] 周山の人が常照寺さんで写したんですね。最後はギメが買ったのではないかと思いますけれども、そこに至るまで、周山のお医者さんである村山さんからどうやって流れていくんだろう。でもそういう経緯も一切書いていない。書いてないんだけど常照寺にあったものを写したというふ

うに書いてあることがものすごく重要で、ほかの地図にどういうことが書いてあるのかよくわかりませんが、来歴というか、どういうふうに繋がっていったかが分かるのは、ギメのものだけなんですか。8枚あるなかで、養志堂のものを写したというのはだいたい分かるんですか。

[藤田] 来歴はギメの表紙が一番はっきりとわかるんですけど、中央大学附属図書館にあるものにも、京都の中で転々と移されていたという情報があります。この地図も調査が予定されていたんですけど、コロナ禍に引っかかってしまってできない状態です。東洋文庫のものは、山形のお医者さんが若い頃京都に修行に来ていて、その時に接して京都で写したということがわかります。だからやはり京都周辺で写されたということですね。「異国渡海船路積図（貿易情報文付旧世界図）」は長崎で写されたり、江戸・大坂で写されたりとか、いろいろなところで写されているんですけど、「大明地理之図」は京都からあまり動いていないような気がします。

[村山] ありがとうございます。やはり「異国渡海船路積図（貿易情報文付旧世界図）」に関しては、オリジナルはどうも長崎で写されたらしいと。さらにそのあと写されて、山国の地域に入った。他のところもそれぞれの地域にあったものが、もとの所蔵者の手から離れて博物館や大学図書館に入ってしまったんですけども、そのようななか山國神社にこれまで受け継がれてきたことは非常に重要なことかなと思

ます。こうしたものに関しましてもやはり調査の中で発見される。「大明地理之図」に関しましては、関係者は知っているという存在だったわけですが、「異国渡海船路積図(貿易情報文付旧世界図)」に関しましては、東京大学のチームであるかどうか、あるいは中央大学のチームであるかどうか、東洋文庫のチームというようなどの調査がないと再発見に繋がらなかったのではないかなと思われるわけなんですけれども、こうした調査をすることの意義というのを藤田先生、何かありましたらいかがでしょうか。

[藤田] そうですね、宮司さんのお話で印象的だったのは、自分たちは虫干しのたびに見ていたということです。そういう地元の世界と学術の世界とが交わるっていうのは、調査をやらないとないわけですね。そこがやはり調査することの大事なところです。常照皇寺さんの史料も、二十数年前に禅文化研究所が調査して目録を作っているんです²⁰⁾。わたしたちはその目録を頼りに調査したわけですが、以前の調査は宗教学の人たちのチームで、考え方が歴史学と違うところもあるので、やはり継続して調査をすることが大事だと思います。

もうひとつは、昔、よくわたしたちは先生から「本棚は糠漬けと一緒にかきまぜないと腐るんだよ」と言われました。わたしの実感でもあるんですけど、常に本棚は触っていないと、どこに何の本があるかわからなくなって、結局必要なときに必要な本が出てこないんです。寺社や旧家の史料も同じだと思います。山國神社のほうは中

央大学チームが長年、調査・整理をされてきましたが、常照皇寺の史料や美術品も整理や虫干しを定期的にやって、どこに何があるかやどんな状態なのかなどが、世代を継いで認識されていくことが大事だと思います。地域の方々だけでは難しい場合は、今はいろいろなところで、歴史・美術・博物館学を学んでいる大学生がボランティアとして地域の方と協力して虫干しをしている事例があります。そして虫干しの合い間に、整理でわかったことを地域の方々の前で発表したり、広報紙に書いたり、そんなこともしているんですね。そういうことを今後、京北でもできればいいなと思っています。

[村山] ありがとうございます。いかに調査が重要だということをおわかりいただけたのではないかなと思います。

もう少しだけ時間がありますのでお話を進めます。いま研究者側の視点としてのお話だったわけなんですけれども、調査を受け入れる側として、鳥居先生何か要望であるとか、お感のところがありましたらお願いいたします。

[鳥居] 山國神社は坂田先生の関係でいろいろ調査していただいています。山國神社に来ていただいたときには、防虫剤を大量に持ってきていただいて、入れ替えてくださってるんですね。学生さんを連れてきてくださいますから、古文書を見ようというのがひとつの目的かもしれませんが、やっぱり長く保っていけるように手当もして下さるので、神社としてはすごく

ありがたい、そのように思います。それと蔵は不思議なもので、多分わたしたちの時間の長さや比べると、どういうふうになるでしょう。蔵のなかにちょっと入れたら百年ぐらいはすぐに残るといふか、経つといふか、そんなようなことだと思うんですね。ですから温度変化も少なく暗い、虫干しというのは必要であるにしろ、ああいうところに入れておくというのは、タイムカプセルみたいな、そういう働きがあって、残りやすいのかなというふうに思います。だから今申しましたように、定期的に来てくださるのは、神社としてはすごくありがたい。

[村山] ありがとうございます。われわれは調査する際には所蔵者の皆さんにご迷惑をかけている、手を止めて時間をいただいているというところがありますので、こういうふうなご意見いただけますと、非常にありがたいと思います。

藤田先生も鳥居先生もおっしゃったように、やはり虫干しの重要性なんかもございますので、冒頭に申し上げましたような京北文化財調査会も、必要であればそういったところも踏まえて、一緒に仕事をさせていただければよいかなというふうに考えております。

今回のお話は重要なところが幾つもありましたけれども、やはり今回は藤田先生の成果ということになります。2枚の地図の来歴がかなり正確に分かってきた。「大明地理之図」は常照皇寺にあったものが、何らかの理由で名主仲間の共有財産に移った。その後、財産処分のなかにおいて、藤

野齋さんが購入されて、さらにその後山國神社に入ったということになります。多くの場合、外に流出します、地域から出ていきます。しかし、それをずっと守り続けてきたというのが、やはり山國の地に残ったことの意義ではないかなというのが、今回の調査、今回のお話で、わたしも勉強させていただきましたし、皆さんにもご理解いただけたのではないかなと思います。長時間にわたりご清聴いただきまして、誠にありがとうございました。最後に、鳥居宮司から一言ご挨拶をいただけたらと思います。

[鳥居] 今日はたくさんの皆さんに来ていただいてありがとうございます。一番心配してましたのは、何人来てくださるだろうかというふうに思って、神社の方、他の方にもよろしくと申してましたけども、実際に今日ここへ来て始まるまで、席が全部埋まるのかなと心配しておりましたけれども、貴重な時間を使って来ていただいて、まずはお礼申し上げます。

それと併せまして、こうして京都市さんで文化財指定をしていただいて、地図を預かっていただいているということなので、いろいろお世話になりました。先生方にも指定に関してお世話になりました。先ほども申しましたが、わたしは正直、来歴はなかなかわからないだろうというような思いでおりましたから、こんなこともわかるんだというのは非常に驚きです。調べていただいてよかったなと思います。

最後に皆さんにお願いといふか、将来的にお願いをしなければならないなと思って

いることがひとつございます。それはですね、地図がだいぶ傷んでいるということなんです。文化財指定するにあたって修理業者さんに見ていただいたところ、修理費用が何百万かかかると。けれども何かいい方法でもって修理ができる時にしないといけないなというふうに思っております。もとより山の本が売れるような時代ではございませんし、山國神社で持っておりますものを売って修理するなんてことはできません。そういうような意味ではですね、皆様一人一人の熱い気持ちを、そういうところで寄せていただかないといけない日が来るのかな、と思ったりしておりますので、最後は皆様をお願いになりますけれども、そういったことをお話しして、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

[村山] ありがとうございました。では座談会はこちらで終了させていただきます。

あとは、京都市の山下さんにお返しいたします。

[山下] 先生方ありがとうございました。文化財にとって大事なことは、所有者とその周りの方が、その文化財のことをよく知っているということだと思います。それが文

化財を大切にすることに繋がると思うので、こうして地元の皆さんにたくさん来ていただいてお話ができて、それを共有できたのはとてもよかったと思っております。今日はお越しくささいましてありがとうございました。そして先生方ありがとうございました。

ひとつお知らせですが、9月27日から京都文化博物館で、京都府と京都市の指定文化財の展覧会をいたします²¹⁾〈図10〉。こちらに2枚の世界地図の実物を展示いたします。「大明地理之図」は通期、つまり9月27日から11月24日まで展示されます。「異国渡海船路積図」は展示替えがありまして、後期の10月28日から11月24日に展示されます。もしお近くに行かれる機会があればぜひお立ち寄りいただければと思います。

この後は展示室で自由参加のギャラリートークをさせていただきたいと思っております。考古資料もたくさん展示してございますので、文化財保護課の展覧会を担当した技師から、そちらの解説をさせていただきたいと思っております。お時間ございましたらお付き合いいただければと思います。本日はありがとうございました。

付記

本稿は、座談会「山國神社に伝わる世界地図をひもとく」の録音記録を文字起こし・編集したものである。

図版出典

図5・6 座談会資料より転載



図10 展覧会「未来へのおくりもの 京都府×京都市指定文化財」チラシ

写真撮影

図4・7・8・9・会場風景・登壇者 京
都市文化財保護課

やました えみ
山下 絵美（文化財保護課 主任（美術工芸品担当））

註

- 1) 京北文化遺産センター令和7年度企画展「世界地図を拓げて一大航海時代の京都と山国」
会期：令和7年7月26日－12月22日
そのほかの関連行事：
〈ギャラリートーク〉9月14日(日)・10月12日(日)・11月9日(日)・12月14日(日)
〈親子向けワークショップ〉「江戸時代の世界地図で遊ぼう！」8月23日(土)
(協力：TOPPANホールディングス株式会社)
- 2) ともに令和7年3月28日、京都市有形文化財（美術工芸品－歴史資料）に指定。
名称及び員数：
異国渡海船路積図 1 鋪
貞享二〈乙ノ丑〉歳再写之等の奥書がある
大明地理之図 1 鋪
元禄三龍集庚午初冬下浣、以養志堂藏書模写之等の奥書がある
所有者：宗教法人山國神社
法量(cm)：
異国渡海船路積図 縦118.5×横121.0
大明地理之図 縦284.5×横365.0
- 3) 昭和9年(1934)6月に、東京大学史料編纂所が模写（東京大学史料編纂所「所蔵史料目録データベース」<https://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w01/detail/full-disp/00013189?page=1&itemsperpage=200>）
- 4) 坂田聡（研究代表者）『中世後期～近世における宮座と同族に関する研究 ―主に丹波国山国荘地域を例に― 平成17年度～平成19年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書(課題番号17520449)』(2008年)所収「山國神社文書目録」。
- 5) 前掲註4 山國神社文書のうち「日本長崎ヨリ異国江渡海之湊口マテ船路積」貞享2年(1685)(226/1-64)
- 6) 令和元年(2019)11月17日(日)京北合同庁舎「山國荘調査団 調査成果説明会」京北合同庁舎3階大ホールにて
- 7) 平成31年(2019)1月28日の京都新聞朝刊で「江戸初期 山国地域で世界語る?京北の神社 貿易地図発見」、同年2月11日の京都新聞オンラインニュースで「江戸初期の世界地図、官軍「山国隊」輩出の地で発見」と報道。
- 8) 前掲註4 山國神社文書のうち「大明地理之図」元禄3年(1690)(366/3-129)
- 9) 「桑田郡山国里」・「秦長椋伊賀加太万呂二人六斗」(奈良文化財研究所「木簡庫」<https://mokkanko.nabunken.go.jp/ja/6AFITI11000104>)
- 10) 前掲註4
- 11) 貞享2年(1685)版『京羽二重』巻六「医書講説」の項に収載。なお、宝永2年(1705)版『京羽二重』巻三「医書講説」の項には「下立売東洞院西へ入」とある(『新修 京都叢書』第二巻、臨川書店、1993年)。
- 12) 『浅井氏家譜大成』によれば、養志堂は周伯没後の宝永の大火(宝永5年〈1708〉)で焼け、その後本拠を名古屋に移したという。
- 13) この座談会後に神戸市立博物館が「大明地理之図」を所蔵していることが判明し、現在は9点となっている。神戸市立博物館編『古地図からひろがる世界―南波松太郎・蒐集70年の軌跡―』(2025年)参照。
- 14) 前掲註4 山國神社文書のうち『八ヶ旧名主諸道具売上帳』明治7年(1874)12月17日(26/1-21)

- 15) 前掲註4 山国神社文書のうち『諸方書物目録帳』安永4年(1775)6月24日(668/5-41)
- 16) 前掲註4 山国神社文書のうち『五霊大明神宝蔵帳箱 山國諸証文入日記』宝暦3年(1753)6月18日(41/1-32)
- 17) 前掲註4 山国神社文書のうち『一宮明神奉納御能舞台地図諸入用勘定目録并諸色訳書』(『山国五社明神奉納舞楽翁三番三』)明和3年(1766)(940/100-6)
- 18) 「一 神宮寺本堂二十座十万遍之修法執行あり。院之座鋪ニハ大明四百余州之地図を掛ケ参詣輩ニ令拜見。」
- 19) 令和6年(2024)8月24日・25日実施。調査員は藤田明良(天理大学教授)・村井章介(東京大学名誉教授)・高橋公明(名古屋大学前教授)・若松正志(京都産業大学教授)・伊藤幸司(九州大学教授)・顧明源(九州大学助教)・村山弘太郎(京都外国語大学教授)・京北文化財調査会代表)・山下絵美(京都市文化財保護課)・今中崇文(同)。調査にあたっては、常照皇寺総代・村山仁志氏に多大なるご協力をいただいた。
- 20) 『常照皇寺文物 調査整理報告綴(全)』(禅文化研究所調査班調査・大南和夫記録、2002年)
- 21) 京都文化博物館2025年度総合展「未来へのおくりもの 京都府×京都市指定文化財」(令和7年9月27日-11月24日)

山科区御陵牛尾町出土の遺物について

熊井 亮介

1. 経緯 (図1)

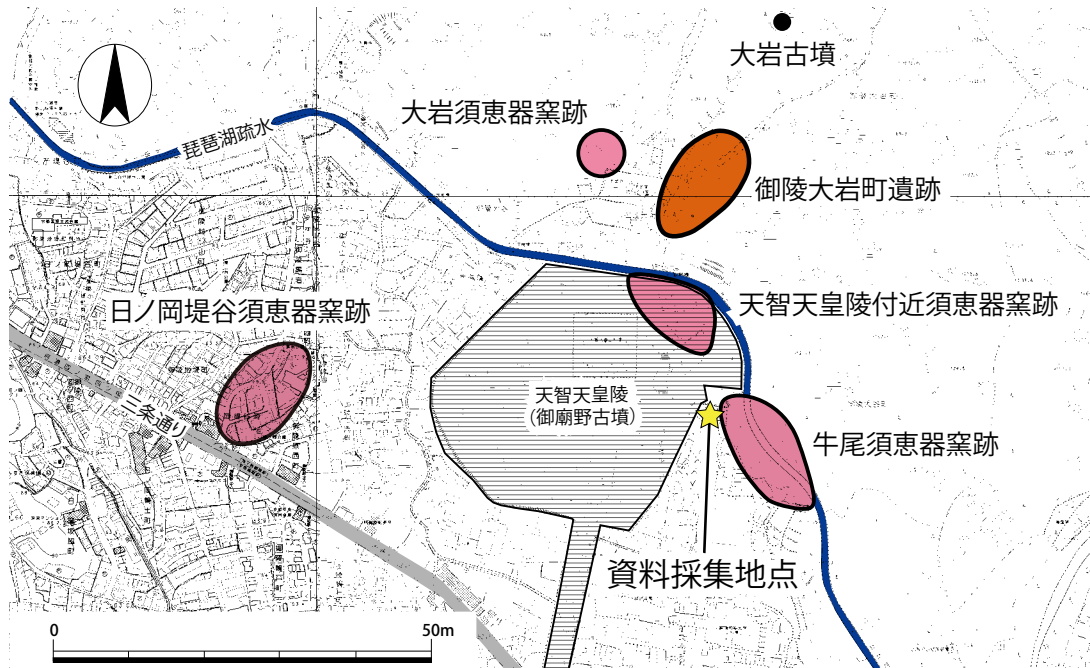
本稿では令和7年度に京都市に寄贈された遺物に関して報告を行う。

寄贈資料は、約50年前に京都市内で採集された遺物である。寄贈者からの情報によると、出土地は山科区御陵牛尾町にあたり、現在は疏水の西側に近接する宅地となっている。当該地で実施された造成工事の際に遺物が出土し、それを採集し現在まで保管していたとのことである。

出土地点は、令和7年時点で周知の埋蔵文化財包蔵地「牛尾須恵器窯跡」の北西縁辺にあたる。この山科盆地北西部には、他

にも日ノ岡堤谷須恵器窯跡や大岩須恵器窯跡、天智天皇陵付近須恵器窯跡といった窯跡群、そして製鉄遺跡と考えられている御陵大岩町遺跡などの生産遺跡が集中することが知られている。しかし、その一方で本格的な調査事例は少なく、現状では遺跡の実態については不明瞭となっている。また、付近は疏水建設など大規模工事・開発が近代以降に急速に進んだこともあり、その影響により損傷・消滅した遺跡も少なくないと思われる。

このような状況の中で、寄贈された資料は遺跡の実態把握を進めるために重要な資料と考えられることから、基礎整理を行い概要について報告を行うこととした。



1 資料採集地点および周辺の遺跡分布図 (1:10,000)

2. 寄贈品の内容について

(1) 概要

資料の全体量はおおよそコンテナ1箱分で、大部分が破片資料である。全部で164点ある。全て須恵器で、器形は杯H、杯G、高杯、盤、甕、壺が確認できる。破片数による内訳は、杯H（蓋・身）が8点、杯G等（蓋・身）が103点、高杯が1点、盤が1点、壺甕類が42点、不明が9点である。現状では出土状況や遺物の全体量等が不明であり、あくまで参考値に過ぎないものの、通常では窯跡出土品の中で多くのパーセンテージを占める甕類が少ない点は特徴的である。

焼け歪んだり焼け膨れの著しい資料、窯体片が融着した資料が多く確認できることから、灰原出土品の可能性が想定できる。以下、各遺物の詳細を述べる。

(2) 個別説明

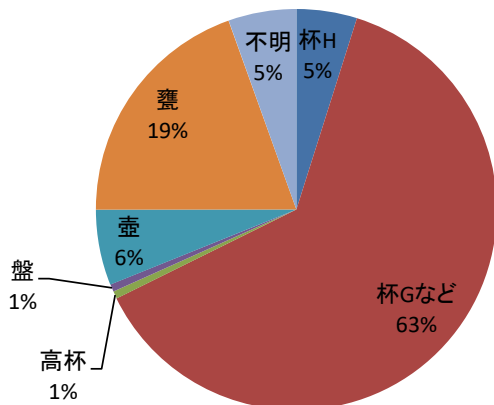
1～6は杯Hと考えられる。1～2は蓋、3～6は身である。1は口径12.0cm、器高3.2cm。天上部はヘラギリによって平らになる。肩部は緩やかに開いたのち下方へ屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。2は

小片のため径は不明である。外面はロクロナデののち、肩部と体部に1条ずつ凹線を巡らす。口縁端部は丸くおさめる。3は口径9.3cm、最大径10.7cm、器高2.4cm以上。4は口径9.8cm、最大径11.4cm、器高2.8cm以上。いずれも底部はヘラギリで、口縁には内傾した短い立ち上がりがつく。5・6は口径・器高は不明である。6は他に比べて砂粒の移動した痕跡を確認できる範囲が広く、肩部のみロクロケズリ。

7～28は杯Gの蓋である。7～12は天上部のみ、13～15は天井部～口縁部、16～28は口縁部付近のみ残存する。ツマミが脱落している個体が多く、同一個体でツマミと口縁端部の双方の形状が把握できるものはない。

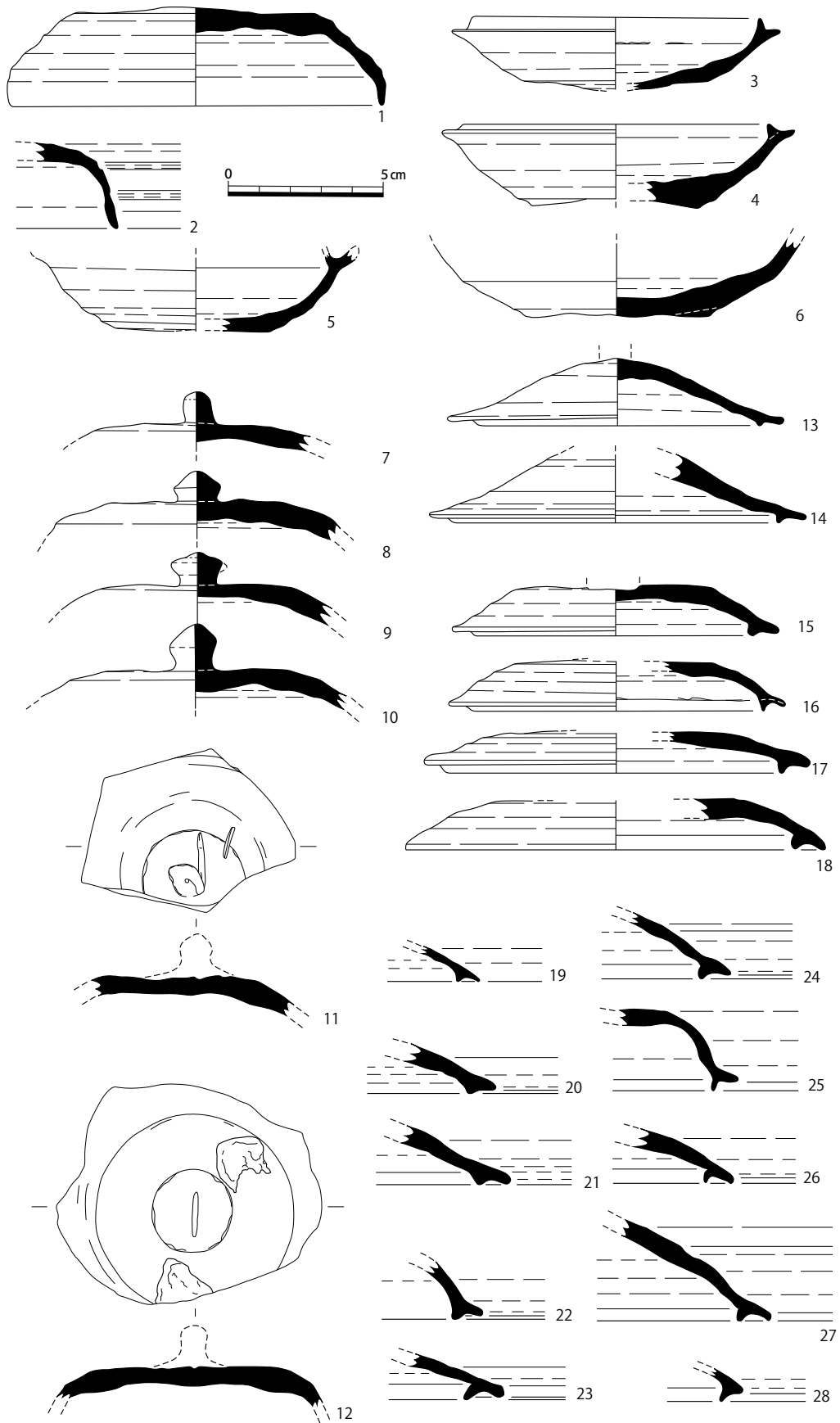
ツマミの形状は2種類確認でき、7は乳頭状、8～10は宝珠状の形状を呈する。11・12は、中央部のツマミが脱落した個体で、12には窯体片が融着する。ツマミの脱落痕の中央部には、粘土の接合痕や棒状工具を用いた「一」字形の凹線が確認できる。この凹線は蓋の位置の目印もしくは接合強度を高めるための工夫である可能性が想定できる。

蓋の形状は、15～18のように肩部に丸

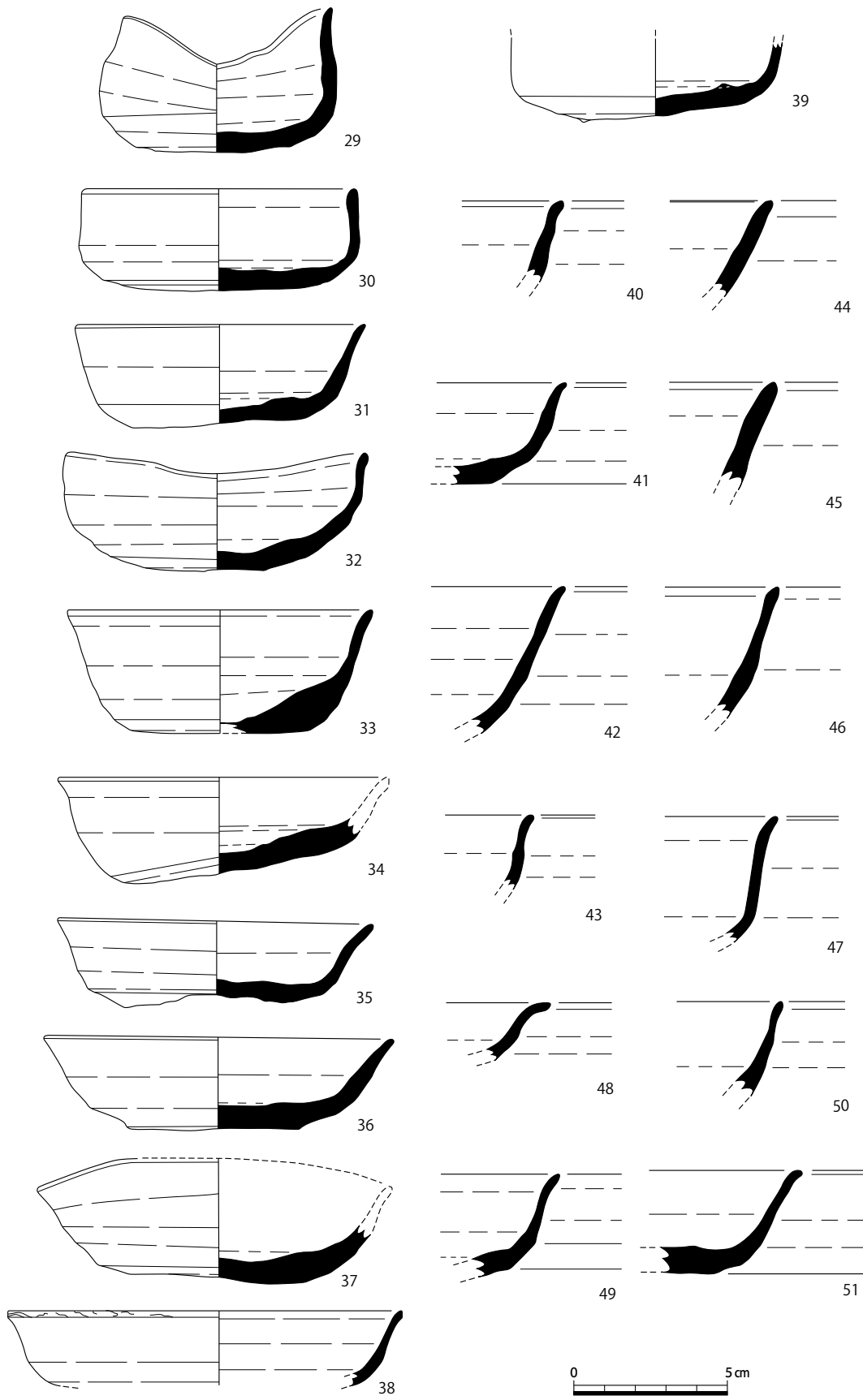


器種	部位	破片数		合計
		実測分	その他	
杯H	蓋	2	0	2
	身	6	0	6
杯Gなど	蓋	24	12	36
	身	28	39	67
高杯	—	1	0	1
盤	—	1	0	1
壺	—	4	6	10
甕	—	2	30	32
不明	—	0	9	9
合計	—	68	96	164

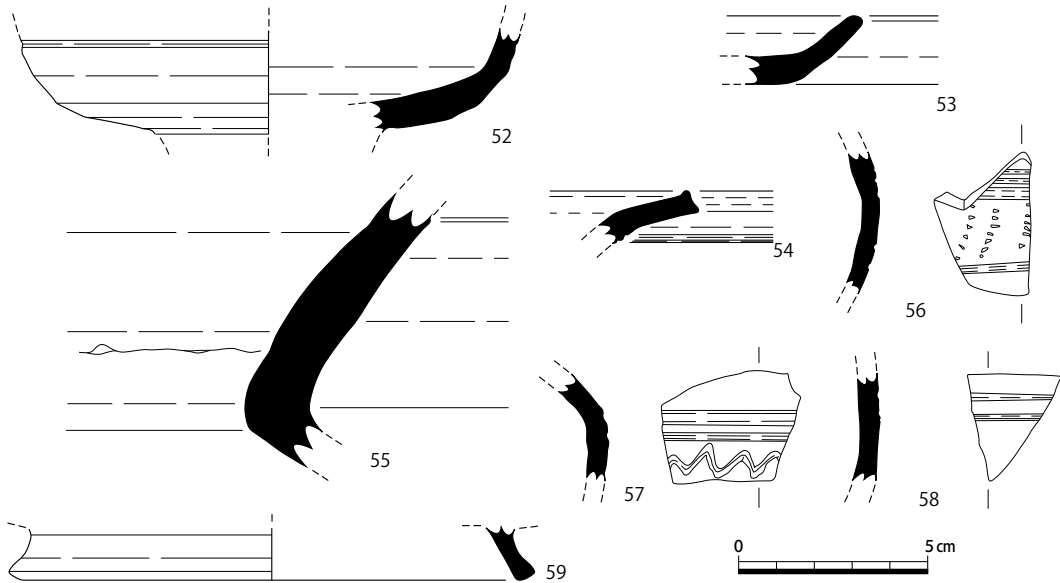
2 寄贈資料の内訳



3 遺物実測図① (1:2)



4 遺物実測図② (1:2)



5 遺物実測図③ (1:2)

みを帯びるものが多いが、13・14のようになで肩状も確認できる。この二種を比較すると、なで肩状の方がロクロケズリの範囲が広い傾向にある。13は最大径10.9cm、口径9.1cm、器高2.15cm以上。14は最大径12.1cm、口径10.4cm、器高2.2cm以上。15は最大径10.5cm、口径9.0cm、器高1.6cm以上。16は最大径10.6cm、口径9.4cm、器高1.6cm以上。17は最大径12.5cm、口径9.8cm、器高1.35cm以上。18は最大径13.6cm、口径11.6cm、器高1.65cm以上。いずれも内側にかえりを有する。

29～51は杯身である。本資料は破片資料が多数を占める事、焼け歪みが著しく口径や形状が実測箇所によって異なることから杯類は一括で報告する。蓋では確実に杯Bと判断できる資料がないことから、杯G及び杯Aがここに含まれるものと考えられる。

29～32と34～38はいずれも焼け歪んでおり、正確な口径は不明である。一応の

大きさを示すと、29は平均口径9.5cmで器高4.5cm。30は口径8.9cmで器高3.3cm、31は口径9.4cmで器高3.4cm。32は平均口径10.8cmで器高3.8cm。33は口径10.0cmで器高4.0cm。34は口径10.6cmで器高3.5cm。35は口径10.1cmで器高2.9cm。36は口径11.4cmで器高3.6cm。37は口径不明で器高3.9cm、38は口径12.8cm、器高2.45cm以上。

底部はいずれもヘラギリである。口縁部端部に面を有するものと丸くおさめるものの二種類が確認できる。

29・30・35は底部に重ね焼きの痕跡があり、かつ内面の一部に自然釉が付着する。また、38は口縁端部に蓋の一部が融着した痕跡が確認できる。

52は高杯と考えられる。杯部の底面はロクロケズリが確認でき、その後に脚が付く中央部にロクロナデを施す。割損しており不明瞭だが、体部に沈線が巡る。

53は小片であるが盤の口縁と思われる。底面はロクロケズリ。

54・55は甕である。54は口縁部で端面にナデによる面を有する。割損しており不明瞭だが、頸部に沈線が巡る。55は頸部である。内面の体部側のみタタキ痕が確認できる。

56～58は壺と思われる。56は右上がりの櫛描列点文が確認でき、その上方に2条、下方に1条の沈線を巡らす。57は棒状工具を用いた波状文があり、その上方に2条の沈線を巡らす。58は2条の沈線を巡らす。

59は高台である。上面は剥離痕が確認できる。幅が広く、外径も大きくなることから、壺や盤などの底部に伴うものと考えられる。なお、破面に部分的に窯体と思われる破片が付着していることから、焼き台等に転用された可能性もある。

(3) 帰属時期について

本資料は約半世紀前の採取品であり、かつ出土状況が不明である。しかし、寄贈者からの聞き取り内容、出土地点や遺物の状況を見る限り窯跡出土品の可能性が高く、時期的にも一定程度のまとまりを有する。

これらの遺物の内容を見ると、①少数ながら杯Hが確認できること、②杯Gが多数を占めること、③杯Bと思われる資料がほとんど無いことから、飛鳥Ⅱ様式に位置付けることが可能と思われる¹。

3. 本資料の位置づけ

(1) 山科盆地の位置と遺跡

山科盆地は、東山によって京都盆地と画された地域で、山城国の北東隅にあたる。三方を丘陵に囲まれて、南下すると巨椋池東岸へと至る。この地形的条件から、山城

国の中でも独立した一地域として認識することが出来る。

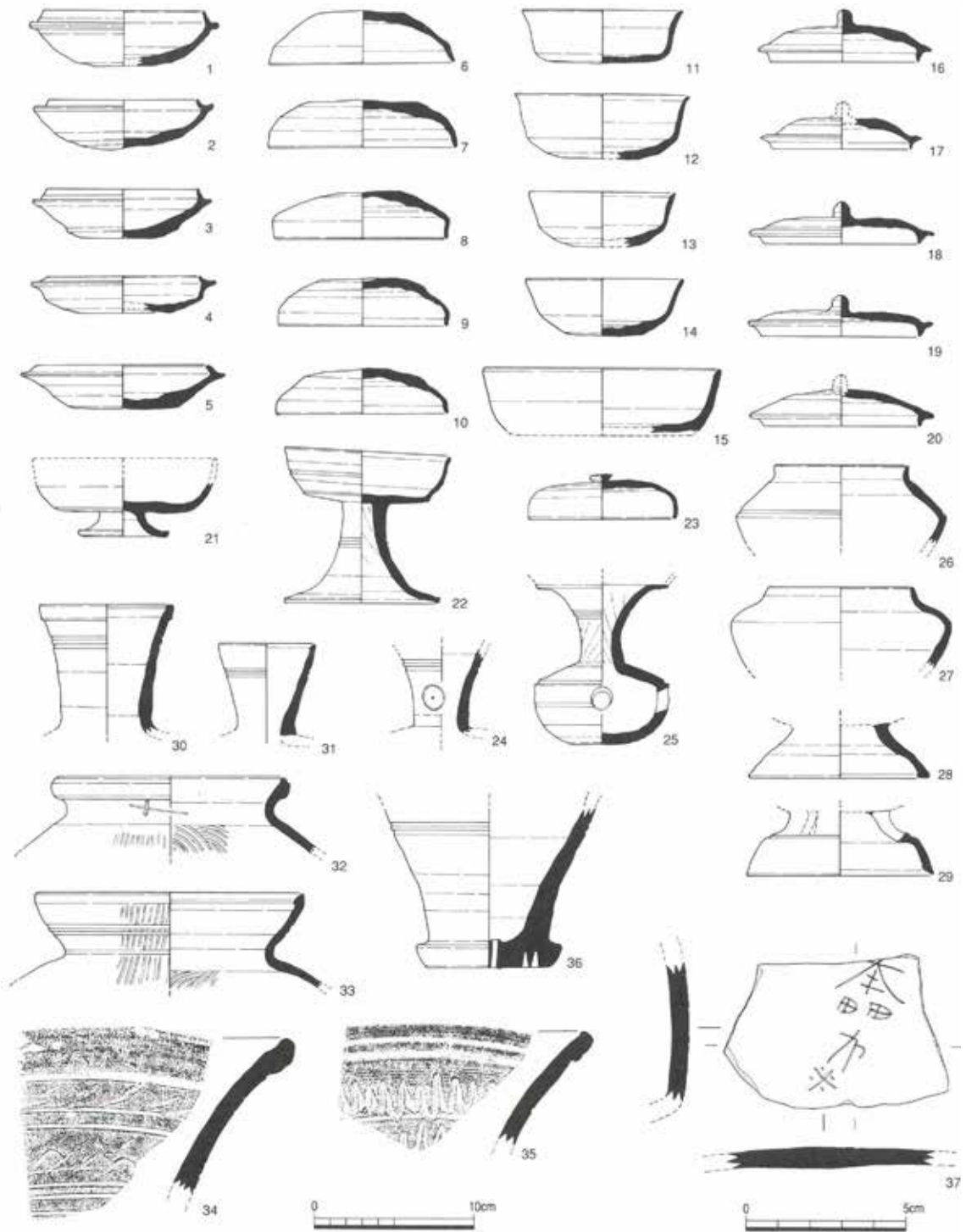
ここでは後期旧石器時代以降、現在に至るまで継続して人の活動痕跡が刻まれているが、特に古墳時代から飛鳥時代にかけての活発な動向は目を引く。

古墳時代から飛鳥時代の遺跡を抽出すると、種別では集落、古墳、生産遺跡、寺院が確認できるが、中核となるのは中臣遺跡である。山科盆地の南部に位置し、山科川と安祥寺川に挟まれた独立丘陵を中心に展開する遺跡で、後期旧石器時代～室町時代の遺構・遺物が確認されている。古墳時代から飛鳥時代にかけては、竪穴建物や掘立柱建物、古墳などが確認されている。弥生時代後期～古墳時代前期には多くの竪穴建物などが確認されており、出土した近江系の受口状口縁甕などは、古くから交通の要衝であったことを示唆する。

古墳時代中期に遺構数は減少する傾向にあるが、中臣遺跡79次調査では中期後半に小型方墳が確認されており、これを初期群集墳とする評価がある²。また、同調査では韓式土器や鳥足文を有する須恵器甕など、百済系の遺物が確認できる点も注目される³。

その後、古墳時代後期末～飛鳥時代には掘立柱建物や竪穴建物が増加する。当該期には、中臣十三塚や旭山古墳群、醍醐古墳群で群集墳が造営されている。これらの群集墳は概ね7世紀前半までに収束すると考えられる。

この時期に生産遺跡も確認されている。日ノ岡堤谷須恵器窯跡や大岩須恵器窯跡、天智天皇陵付近須恵器窯跡、大峰窯跡、朝日稲荷窯跡といった窯跡のほか、詳細不明

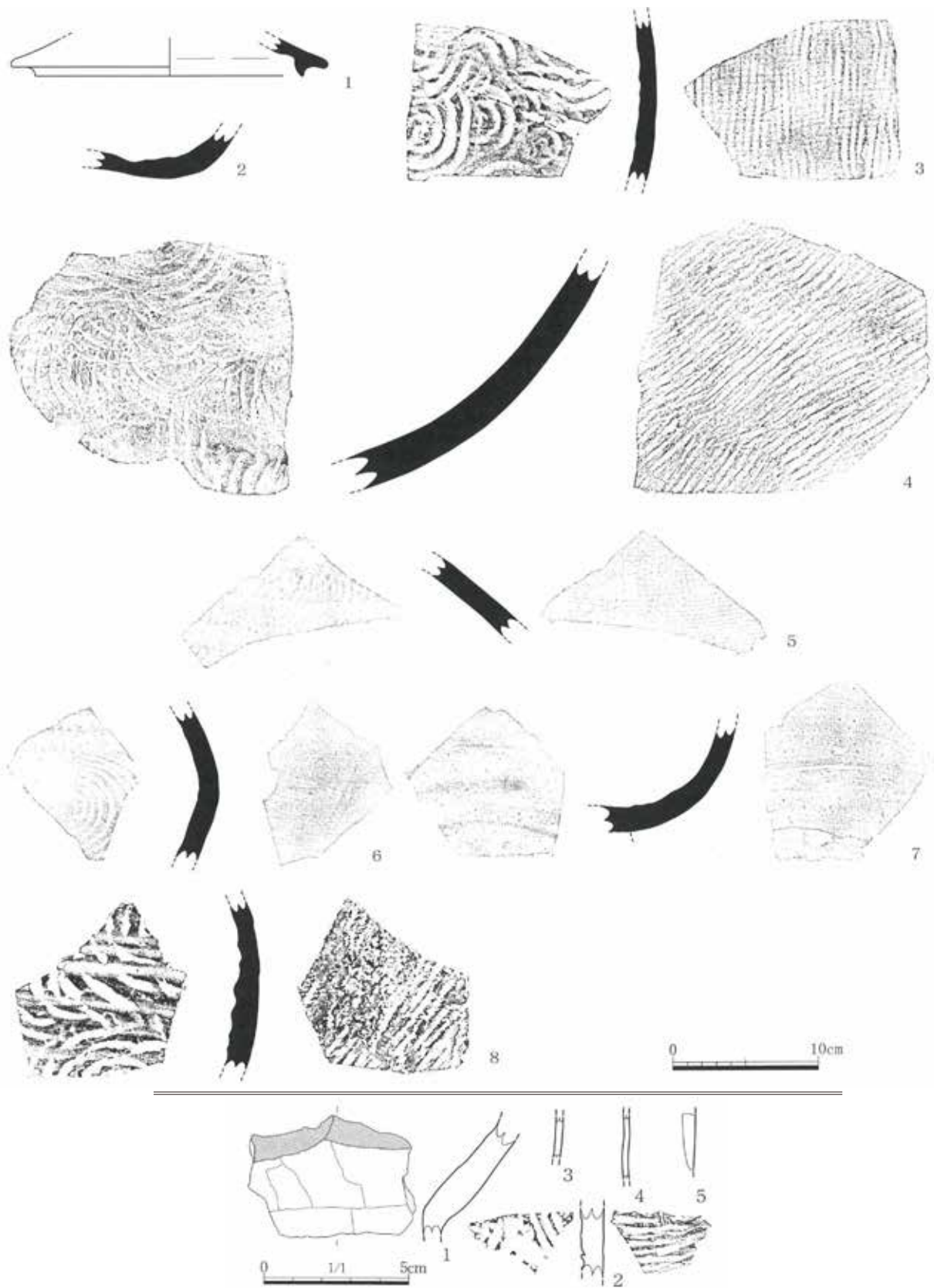


6 日ノ岡堤谷須恵器窯跡の出土遺物実測図（1：4、1：2）

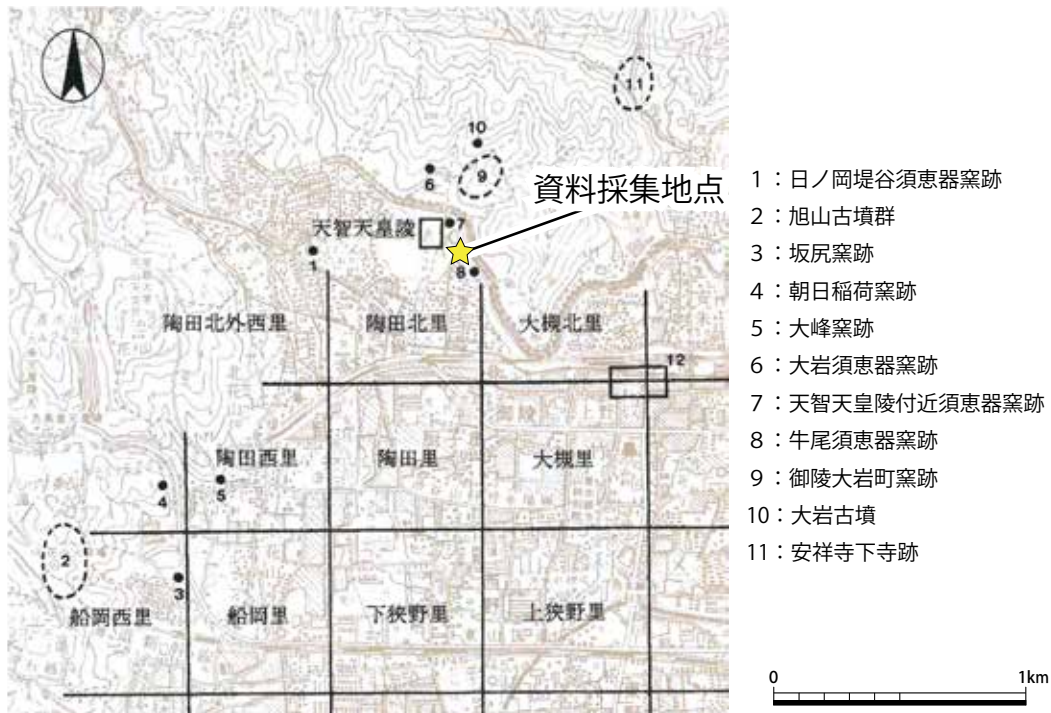
※『京都市埋蔵文化財調査概要 平成7年度』より転載

ながら製鉄遺跡と考えられている御陵大岩町遺跡も当該期に遡る可能性がある。窯跡については、窯業期間は7世紀第3四半期までにおさまる可能性が指摘されている⁴。

この窯跡に近接または重複して7世紀後半に天智天皇陵（御廟野古墳）が造営される⁵。なお、山科盆地で最古の寺院は大宅廃寺で、造営は7世紀第3四半期まで下る。



7 天智天皇（山科）陵内で採取・出土した須恵器（上 1：4 下 1：2）
『書陵部紀要』（陵墓編）のうち、横田真吾（2017）および加藤一郎（2021）報告より転載



8 山科盆地北部の主な遺跡と古代条理 (1:30,000)

丸川義広 (1996) より転載に加筆

(2) 山科盆地の窯跡群について

これまで踏査成果や表面採取資料からその存在が指摘されてきた。しかし、琵琶湖疏水をはじめ、早くからこの付近での開発が行われたこともあり、これまでに本格的な調査が実施され、様相が判明した事例は少ない。

その数少ない調査事例として、日ノ岡堤谷須恵器窯跡があげられる⁶。ここでは平成7年に発掘調査が実施され、岩盤を掘削して築造した窯1基が確認された。この調査により、窯の構造や出土遺物の内容が明らかになっている。窯体の補修痕跡が少ないこと、床面に重複が認められないこと、灰原の規模が小さいことから操業期間が短期間に限られていた可能性が指摘されている。出土遺物は須恵器杯H・Gなどが確認されているが、数量的には杯Hが圧倒的に多いとされ、TK217型式期と報告されている。

ほかには、陵墓参考地である天智天皇陵(御廟野古墳)で水路整備工事に実施された立会調査の際に窯の焚口付近を確認しているが、出土遺物は確認されていない⁷。ただし、周辺では飛鳥Ⅱ様式のものと思われる須恵器片が表面採集・出土しており、陵墓参考地内に所在する窯跡の時期を考える上で注目される。

本資料は、おおよその出土地点以外の情報は不明だが、窯跡に伴う遺物である蓋然性が高く、時期は概ね飛鳥Ⅱ様式に位置付けられる。この資料は日ノ岡堤谷須恵器窯跡よりも新しく位置付けられるとともに、御廟野古墳内で採集されている須恵器片とほぼ同時期と考えることが出来る。なお、外構柵修繕工事に伴う立会調査で遺物が出土した地点は、本資料の出土推定位置と極めて近く、時期的な齟齬も無いことから、同一の窯に由来する資料である可能性もある⁸。

(3) まとめにかえて

今回、報告した寄贈資料は既に削平された可能性の高い須恵器窯跡の一端を示す資料として注目される。

山城国は王権の経済的基盤となった畿内の1つであり、御廟野古墳や平安京といった都城が設置された。これを踏まえると、この地域の遺跡の動態を追うことは、王権による地域把握の実態を明らかにすることにつながる可能性がある。

山科盆地は交通の要衝であり、古くから遺跡が確認されているにも関わらず、これまで明確な首長墓は確認されていない。しかし、古墳時代中期後半には中臣遺跡で初期群集墳と考えられる小型方墳のほか、韓式土器などが確認されている。また、古墳時代後期末から飛鳥時代にかけては、竪穴

建物や掘立柱建物が増加し、須恵器窯跡などの生産遺跡も確認されている。

詳細不明ながら、製鉄遺跡の可能性が想定されている御陵大岩町遺跡の存在も踏まえると、山科盆地は手工業の拠点となっていた状況が想定される。

南北朝時代に成立した『帝王編年記』には「山城国宇治郡」に中臣鎌足の「山階陶原家」が所在したとする記述があり、山科盆地北西部の窯跡群が所在する付近が、山科条里の「陶田里」に該当することから、その両者の関連性が指摘されている⁹⁾。

文献資料等と遺跡の動態については将来的に山科盆地の遺跡を総合的に捉えて大いに検討すべき課題である。しかし、現段階では不明瞭な点も多く残されていることから、まずは地道な基礎資料の整備を行い、土台をつくる必要がある。

くまい りょうすけ
熊井 亮介 (文化財保護課 文化財保護技師 (埋蔵文化財担当))

註

- 1) 西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』1982
- 2) 中久保辰夫「山科の遺跡と御廟野古墳」『古墳の週末と天智天皇陵』2023
- 3) 内田好昭ほか「12 中臣遺跡79次調査」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所2002
- 4) 森浩一「あとがきにかえて」『論集 終末期古墳』1973
- 5) 天智天皇は672年に崩御。
- 6) 丸川義広ほか「19 日ノ岡堤谷須恵器窯跡」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所1997
- 7) 横田真吾「天智天皇 山科陵水路その他整備工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』(陵墓編)第69号、2017
- 8) 加藤一郎「天智天皇 山科陵外構柵修繕工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』(陵墓編)第73号、2021
- 9) 丸川義広『日ノ岡堤谷窯跡の発掘』リーフレット京都No.88、1996

【参考文献】

- ・田辺昭三『須恵器大成』1981
- ・平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群I』1966
- ・奈良文化財研究所・歴史土器研究会『飛鳥時代の土器編年再考』2019

京都市文化財保護課研究紀要

－ 投稿規定 －

(名称)

1. 紀要の名称は『京都市文化財保護課研究紀要』とする（以下、本紀要とする）。

(目的等)

2. 本紀要は、京都市における文化財の調査等を通して得た研究成果を広く社会に発信し、専門領域の学術的な進展に寄与することを目的とする。
3. 前項にいう専門領域とは、建造物、美術工芸品、民俗、史跡、名勝、天然記念物、埋蔵文化財、文化遺産等、文化財保護課において扱うものを指し、これらをもって本紀要の主要項目とする。
4. 本紀要の編集及び発行は、本規定の定めるところとする。

(投稿資格)

5. 執筆者は、原則として、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の職員及び職員の経験が有る者とする。ただし、編集委員が執筆を委嘱する場合はこの限りではない。

(原稿の種類)

6. 本紀要に投稿できる原稿の種類は、論文、研究ノート、資料紹介等とする。
7. 論文は、原則として未発表のものに限る。

8. 論文は本文・註を含めて一篇20,000文字以内、挿図は20点以内、あわせて40ページ以内とする。欧文は、1文字を2分の1として計算する。
9. 研究ノート、資料紹介は原則として一編8,000文字以内とし、挿図の点数は特に制限を設けない。但し、総頁数は20ページ以内とする。
10. 一回の投稿は原則として完結した一篇に限るが、原稿量が大部の場合は、編集委員と協議の上、分号することを認める。

(原稿のエントリーと締切)

11. 執筆のエントリーは、別途様式にその題名、説明文、氏名等を明記の上、編集委員に提出する。なお、原稿の締切日は別に定める。

(原稿の体裁)

12. 原稿の提出はデータで行い、必要に応じて割付指定用紙を添える。横書きを原則とし、完全原稿として提出する。
13. 挿図、表等の数量と大きさは、執筆者の意向を尊重しつつ編集委員が決定する。
14. その他執筆細目は、別途定める。

(校正)

15. 執筆者校正は1回とし、あくまでも誤植訂正等にとどめる。原文の大幅な増減は認めない。

(著作権等)

16. 論文等に使用する挿図・写真には、「執筆者撮影」を含め、出典を明記する。
17. 挿図等に用いる写真や挿図の掲載については、執筆者が自らの責任において、日本国における慣行を配慮しつつ、事前に書面等により許可をとる。但し、必要に応じて、文化財保護課として許可を求める依頼文を作成する。
18. 職務上、知り得た個人情報については言及しない。また、個人を特定できる写真等は掲載しない。但し、祭礼、習俗等に係る事例は、事前に保存会等に許可を得た上で掲載する。また、新出の個人所有の文化財については、許可を得た上で「個人所有」として掲載する。

(その他)

19. 差別用語等、人権に係る事例については執筆者が自らの責任において公務員倫理に則り、適切な記述を行う。なお、編集委員により不適切と認められた場合は、指示に従い、表現を改める。但し、史料等原文の引用、翻刻等においてはこの限りではない。
20. その他、この規定に記されていない事項については編集委員が判断する。

(改廃)

21. この規定の改廃は、文化財保護課の議決を経て行い、周知する。

附則

平成29年11月 制定

2026年（令和8年）3月 発行

京都市文化財保護課研究紀要 第9号

編集・発行

京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488 分庁舎地下1階

TEL) 075-222-3130 FAX) 075-213-3366

京都市印刷物 第072334号
